バカとマフィアと召喚獣

carzoo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとマフィアと召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ２２５９Ｙ

【作者名】
ｃａｒｚｏｏ

【あらすじ】
少年はマフィアだった。少年は死神だった。
そんな少年神竜　一真の周りではハチャメチャなことがいっぱい！
一真はこの日常を過ごしていく。
ドキドキ青春ハーレムラブコメ開幕！

設定（前書き）

バカテス投稿よろしくで～す

設定

オリジナルキャラ設定

名前　神竜（じんりゅう）　一真（かずま）　主人公

文月学園2年Fクラスに所属している。殺人剣技〔桜炎双闇流〕の使い手で常に木刀を持ち歩いていて、銃、ナイフも好きで、かばんに大量のエアガンとゴム弾入りの銃、腰のベルトにゴムつきのナイフを持っておりウエストポーチにスタンガンを装備あまりに危険なことから「学園1の危険人物」、の称号を、近所の不良から〔孤独の死神〕の肩書きを持っている。超不幸体質でフラグ建築士、成績はAクラス並文系は、教師クラスであり、理系もAクラス並、（元学年主席）である。木下姉弟と幼馴染　料理のレベルは最高でバイトもしている　元マフィアのボスでその時に敵との抗争中、自分が親と実の兄に虐待されて捨てられた過去を思い出しその時に周りから〔死神モード〕と呼ばれる状態に無意識に入ってしまい、この状態のときは、自分を殺してほしい感情とその残虐性が目覚め、自分を孤独なものと思い、対象を破壊するまで止まらない。マフィア界での通り名は〔絶望の死神〕後、「緋弾の○リア」のヒステリアモードも使用できる（なぜかそうなってしまった）。集中しているときは、「集中モード」、怒ってしまいほぼ自我が崩壊したときは「暴走モード」とさまざまなモードを持っている

顔は良く（ヴェ○トゥス）、髪はキン○ダムハーツのソラの髪の色が黒のような髪型身長１６８ｃｍ体重４５キロ（モヤシ）

サッカーが得意で現在日本代表のエース（Ｕ２２）で、代表の試合に行っていたため試験を受けてないのでFクラスになった。

召喚獣　基本デフォルメ一真だが服が改造学ランで必ずベルトにスタンガン学ランの中にナイフが装備されており、教科によって武器が変わる

武器　基本文系が銃　理系が近接系となっている

文系（）は平均点数

・日本史　右手　ショットガン　左手マシンガン
・世界史　バルカン砲
・現代社会　対物ライフル
・地理　右手ライフル　左手拳銃
・現代国語　二丁ライフル
・古典　ガトリング砲
・政経　メタルバースト

理系

・物理　太刀（姫路の剣と同じくらいの長さ）
・化学　木刀
・数学　トンファー（両手）
・英語ｗ　ランス（モ〇ハンのアカムノ奴）
・生物　クレイモア
・

その他

・英語　ビームサーベル
・保健体育　日本刀

総合科目　ガンブレード

腕輪は銃、剣、その他、で、三つずつある

銃

1、爆炎放射（ばくえんほうしゃ）・・・銃に炎をチャージして銃口からとてつもない火力の“爆炎”を噴出す

2、龍滅爆砲（りゅうめつばくほう）・・・銃を撃つと龍の光線に変わり相手に“龍”が襲い掛かる
3、空中爆発（エアバースト）・・・銃に全てのナイフをセットし大量に出し空中で彗星のごとく爆発させる

剣
1、空間爆発（くうかんばくはつ）　剣で切った空間を爆発させることができる
2、人炎爆発（じんえんばくはつ）　剣で相手を切り、中に爆薬をしみこませ召喚獣が指を鳴らすと体の内部から爆発が起こる（超グロイ）
3、龍切り神殺し（りゅうぎりかみごろし）　一つの部位を切ると続けて何撃もの斬撃が襲ってくる

その他
1、イマジンブレイカー　相手の召喚獣の攻撃を受け付けない（左手首から上限定）
2、エターナルペイン　相手に攻撃すると相手自身にも痛みが来る（自分も攻撃を食らうと2倍ほど痛く、点数がかなり消費されるのであまり使わない）
3、フルバースト　すべての点数と引き換えにフィールド全体に大爆発を引き起こす（自分は痛いのであまり使わない）応用として、一転集中型の「ＧＯＤＤＢＵＲＮＥＲ（ゴッドバーナー）」がある。

桜炎双闇流・・・・桜、炎、闇、の三つの方がありそれぞれ五つの技とひとつの奥義で形成されている。奥義の型もあり、三つの技と最終奥義に分けられる。召喚獣も使える

桜・・・華麗に相手を切ることお基準として考えられた型

一式　枝垂桜（しだれざくら）　連続した縦切り

二式　夜桜（よざくら）　色々な方向からの連続切り
三式　満開（まんかい）　最大の力での一閃
四式　狂い咲き（くるいざき）　たくさんの敵を目にも留まらぬ速さで一瞬で切り裂く
五式　桜吹雪（さくらふぶき）　ある一箇所を高速で切りまくる

奥義　桜花（おうか）　変則的な動きで敵をかく乱し華麗に敵を一閃する

炎・・・圧倒的な力で敵をねじ伏せることを目的として創られた型
一式　火炎爆発（かえんばくはつ）　同じ場所を相手の武器または骨が折れるまできり続ける
二式　鳳凰火（ほうおうか）　両腕を高速できりつけ使えなくする
三式　不知火（しらぬい）　最大速度で斬りつける（止めた時はその部位が3時間使えない）
四式　獄炎破滅陣（ごくえんはめつのじん）　モ〇ハンの太刀の鬼神切り
五式　炎歌（えんか）　歌のテンポでばらばらに切りつける歌が終わるまでやめない

奥義　獄炎（ごくえん）　ただ相手を切るだけでも切れるまで何度でも切り続ける

闇・・・泥臭く相手の裏を取り最小限の力で敵を倒す型
一式　暗闇（くらやみ）　ワイヤーでくくりつけた剣を投げ、引き戻して刺す
二式　暗閃（あんせん）　相手の上を飛び後ろに回り一閃する
三式　裏闇（うらやみ）　右に行くと見せかけての高速バックターンで左に行き一閃する（刀を下に刺さないと、回っても倒れてしまう）
四式　闇黒（あんこく）　前から突っ込んで行き、そこから真横を通って後ろに行き刺す
五式　闇転（あんてん）　刀を抱えて転がり後ろに来たところで刺す

奥義　双闇（そうあん）　二本の剣で一本をフェイントとして前で戦ってる間に

もう一本の剣で暗闇をして刺す

奥義・・・文字どうり奥義

一式絶滅（ぜつめつ）　自分の武器を全て、上へワイヤーをつけて投げ敵に対してめちゃくちゃな切断攻撃を与える

二式竜神殺し（りゅうぎりかみごろし）　足技で敵を追い詰めて縦切りを食らわせる

三式殲滅（せんめつ）　真正面から突進して突き刺す技

最終奥義　斬閃（ざんせん）　相手の攻撃をバックステップでかわしバランスを崩させて首を切る

名前　　破神　当麻（はしんとうま）　サブキャラ

一真の友達で一真と同じ不幸体質、いつも一真と共に不幸に会っている。同じサッカー日本代表で、一真とのコンビは抜群、雄二、明久、一真、当麻のいたずらは教師の悩みの種。成績は理系だけできて、他は壊滅的、特に政経は視力検査。元一真の側近。語尾に「にゃー」とふざけた口調で普段は話す。怒ったとき、真剣なときは普通の口調。

容姿はソラのやる気がなさげなバージョンで髪はキン○ダムハーツのリク

召喚獣
デフォルメ当麻だがワイヤーナイフで戦う
腕輪
バースト　ワイヤーナイフが一本一本爆発していく

名前　大神　祐輝（おおがみゆうき）　サブキャラ

Fクラスただ一人の常識人（たまに途中で壊れる）。仲間のためなら何でもする、一真、当麻、雄二、明久のことを尊敬しており、よく一緒に行動する。元学年次席で海外に行ってたため振り分け試験を受けなかった。一真の友達で、明日菜の夫（年齢制限の無い国で入籍した）

容姿は茶髪に黒目の超イケメン（キラ＝ヤマトのような感じ）

召喚獣
デフォルメ大輝でビームライフルとビームサーベルを装備

腕輪
スターダストスラッシャー　背中から羽が生えて羽から八本の光線を撃つ

名前　山口　怜奈（やまぐちれな）　ヒロイン

Ａクラスで学年三位の成績、一真とはイタリアで住んでいたころ、マフィアに襲われていたところを助けてもらう、それ以来一真に好意を持つが空回りして優子と一緒にサブミッションを仕掛けている。

容姿はとある〇術の〇書目録の御坂美琴

召喚獣
もう全部、御坂〇琴そのまま
腕輪
レールガン

名前　　水野　朱里（みずのじゅり）　当麻の彼女

当麻の幼馴染で、当麻が大好き。しかし肝心の当麻が気づいてくれない為少々腹を立てている。
怜奈の従姉妹Ａクラスの４番手

容姿はキ〇グダムハーツのアクア

召喚獣
着物を着ていて、薙刀で勝負する。

腕輪

光学切り　光を操り敵を切る

名前　　柴崎　彩夏（しばさきあやか）　ヒロイン

Ａクラスで学園の癒しと言われる程の超絶美人、三年からの告白も全て断っている。ある理由で多分、一真が好きなんではないかといわれている。過去に何かで助けてもらったと言う噂も。留年している

容姿は小さい、胸が大きいかわいい顔の三拍子そろった超絶美人、

召喚獣

鎧を着けていて、なぜか魔法杖

腕輪

サイコキネシス　相手の動きを３０秒間止めることができる。

名前　十六夜　明日菜（いざよいあすな）　　祐輝の妻

祐輝の妻で、Ａクラス。一真の幼馴染でもあり、一真の能力を最大限生かした戦い方を知っている数少ない一人。基本祐輝思いでおっとりしている。

容姿　そ〇おとのイカロス

召喚獣　祐輝の、翼が白になったデフォルメ明日菜。

腕輪

絶対的防御権（イージスブロック）

指定した相手を、一分間完全に防御する結界が張られる。

設定（後書き）

はいｃａｒｚｏｏです。今回はバカテスで～ス（っていうか他の作品全然進んでない）
ま、よろしくおねがいすま～す

第1話　最強と馬鹿

第1話
最強と馬鹿

文月学園

新設校にして、現在世間で最も話題を呼ぶ新技術“試験召喚システム”の試験採用校。
学力低下が嘆かれる昨今に新風を巻き起こし、進学校であると同時に最新技術の実験場としても知られるこの学園。
それ故に、多くのスポンサーが付いており学費は極めて安い。

そんな文月学園の校門にて、学校指定のカバンと木刀を持ち、学ランを某マフィアのひばりさんのような着かたをしている少年が1人。
とその隣のだるそうな少年が一人
時間が時間故、筋肉隆々とした体格の良い教師に呼びとめられていた。

ここから、物語は始まる

「遅いぞ、神竜、破神！」
「「あっ、はよッス。西鉄」」
「その呼び方を名前の様に扱うな！それが教師に対する態度か！」
「え？　……先生の名前って、西鉄じゃないんですか？」
「そうですよ先生の名前って西鉄筋肉ズですよね？」
「吉井ですら知っている事を知らんのかお前達は！？破神は、プロ

野球チームか！」

少年の目の前にいたのは、生活指導の西村教諭。
トライアスロンが趣味の肉体派であることから、通称“鉄人”

少年“神竜一真”と“破神当麻は、その彼に目をつけられている問題児達である。

「それより、他に何か言う事があるんじゃないか？」
「「え？　えーっと……今日も肌が黒いうえに暑苦しいですね？」」
「お前達は遅刻の謝罪より、俺を罵倒する事と肌の色の方が大事なのか？　……まあ良い、受け取れ」

茶色の封筒を差し出され、それを興味なそうに受け取った。

「あまり関心があるようには見えんな？」
「どこだろうと、戦って勝てば設備を奪えるのがこの学園の特色でしょう？　不満だったら奪えば良いだけです。俺は“元学年主席”の天才ですよ？」
「ちなみに当麻さんはもう分かりきってま～す」
「そうか。流石は我が学園の問題児の中で、最も過激思想の持ち主で天才だな。それに、貴様らはサッカーの試合なんぞで試験を休みおって」
「心外です俺は自分の好きなことに命をかける男ですよ？」
「その証拠にぼろかすにして勝ってきましたし」
「……それ位勉強にも気合を入れていれば、今頃Ａクラスの首席として立っていた物をまあ破神は別だが」

彼の言う問題児とは、主に吉井明久と坂本雄二、そして神竜一真、破神当麻の事。

常に大量の武器を持ち歩き身体能力は学年１の危険人物神竜と常にだるそうにしながらも悪知恵を働かせる参謀破神、と教師の間では恐れられていた。
のりづけされた封筒を破り、その中に入っていた紙を見ると……

「Ｆかまあ普通かな」
「当麻さんもＦで～す」
「お前の幼馴染は、弟の方が同じだ。残念だったな？」
「残念じゃなくて、喜びですよ。片方はともかく、あいつとクラスが一緒だなんて冗談じゃない」
「にゃはははは」
「何だ、違うのか？　まあいい、急げ」

全く……と、愚痴を漏らして、彼らは校舎へと。
そこから靴箱に到着したところで……

「ん？　よう明久」
「明久はよ～」
「あっ、おはよう一真、当麻。どうだった？」

彼の去年のクラスメイトにして、同じく悪友である吉井明久。
学力的に最低ランクのバカさと、行動力により彼と同様に鉄人に目をつけられていると同時に、バカの代名詞である“観察処分者”の称号持ち。
苦笑して、全然のジェスチャーを交えての宣告。

「Ｆだった、まあ試験受けてねえから俺達」

「じゃあ、僕と同じだね？」
「ははっ、まあ仲良くやろうや」
「よろしくな！」

基本、いじられ役である事が多い明久だが、一真と当麻は彼をいじる事を良しとはしていない。
どことなく、自分と何か強く通じるものを感じていたためである。

それはさておき、彼らは2人でFクラスへ。
途中興味本位で覗いたAクラスの教室を見て、3人は驚愕した。

「何じゃこりゃ？！」
「凄すぎ！」
「はあ、一真は真面目に受けてたらここだったのか」
「んま、あれやってこの教室掻っ攫えばいいだけの話だね」
「さすが元学年主席いうことが違うにゃ～」
「だね当麻」

この学園が注目される理由の一つにある、試験召喚システム。
試験の点数がそのまま強さに影響する召喚獣を呼びだし、それを使ってクラス間競争である“試召戦争”というシステムがある。
それを使用し、AからFまで異なる環境を施し、簡単に“良い設備がほしければ奪い取れ”のシステムのもと、日夜勉学に励む者達。

当然エリートであるAクラスは、それ相応の高待遇。
そして、彼ら2人が所属するFクラスは……

「なんか、近づいただけで格差があるのがわかるね？」
「ああ……さっきはああ言ったが、もう嫌気がさしてきた」
「当麻さんも同意します」

「それはそれとして、早く入ろうよ。よし、それじゃまずは明るく行こう」

見るからに、建て付けの悪そうな戸を開くと……

「すいません、ちょっと遅れちゃいました」

「早く座れ！　この蛆虫野郎ども！！」

教壇にいたのは教師ではなく、彼らの悪友である坂本雄二。

見るからにガラの悪そうで、かつては悪鬼羅刹と呼ばれた男。

「いきなり挨拶だな。そんなところで何やってる？」

「先生が遅れてるらしいから、代わりに教壇に上がってみた。何せ俺がここの最高成績保持者……つまり、代表なんでな」

「ほうっ……でも傍から見たら、お山の大将気どりのゴリラにしか見えんな」

「あっはは、それ面白いくくくくく」

「何だとこのモヤシ野郎に間抜け不幸、サラダにしてやろうか？」

ボキリと指を鳴らす雄二と、木刀を構える一真とゴムナイフとスタンガンを構える当麻。

竜虎相対す、という雰囲気にクラスは沸いた。

「そんなもんに頼らないとケンカも出来ねえのか？」

「黙れよ。腕力なんて時代遅れだってこと、その身を持って教えてやる」

「いっぺん死ねクソゴリラ」

クラスが同じで面識がある上に、文月学園の問題児フォースと称されるだけあって彼ら４人は仲が良い。

当然、こういったやり取りも割と一般的だった。

「あんた達、去年から良く飽きないわね？」
「げっ！　しっ島田さん！？」
「ちょっと吉井、何よその“げっ！”って？」

現在教室の中での紅一点、島田美波が呆れたように乱入してきた。
去年から何かと痛い目あわされてる明久は、傍から見ても分かるほど顔を青ざめた。

「よう島田、お前もFだったのか？」
「はろはろ～。ウチまだ日本語の読み書きが苦手だから」
「帰国子女ならではの弱点だな」
「当麻さんと同じですね」
「お前は日本語が苦手なだけだろ馬鹿」

その場に顔を連ねているのは、ほぼ全員バカの代名詞を受けて当たり前な者達。
しかも全員が男で、ただ1人女子が居ると言うだけのムサっ苦しい空間。

「それはそれとして、島田が居てくれてよかった」
「え？　そっそう？」
「だよね。こうもムサっ苦しい上にカビ臭い空間だから、ほんのちょっとだけ膝があらぬ方向にぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！」

いつのまにかひっくり返され、４の字固めに処され悲鳴を上げる明久。
いかにもへし折らんと言わんばかりに、ギリギリと嫌な音を立てつつ力を入れる美波。

そして、そのスカートの中に注がれる視線。
「やっぱりお前もいたのか、康太」
「康太がいれば面白いニャー」
「……よろしく」
「趣味についてとやかく言えた義理じゃないけど、犯罪はやめとけよ？」
彼の言葉もどこ吹く風と、主に美波のスカートに視線を注ぐ少年、土屋康太。
通称“寡黙なる性職者ムッツリーニ”。
「あいたたたた……」
それから程無くして解放され、膝を擦る明久。
「お前も学習しろよ。だからバカなんて呼ばれんだろ？」
「相変わらず朝からにぎやかじゃのう。一真と当麻も相変わらず、明久の世話を焼いておるようじゃな？」
「ん？　よう秀吉。えーっと……」
「席は好きな所に座っていいそうじゃ。どれ、あそこにちょうど４つ程席が空いておるし、そこに移ろうかの」
目の前にいる、翁言葉で話す美少女……いや、美少年である木下秀吉。
荷物をまとめ、一真と明久と当麻を伴い空いている３つの席へ。
「なっ、何だ？　座布団、綿がほとんど入ってないのかよ？　しかも畳、破れてる上にキノコまで！？」
「この卓袱台、痛みまくってるよ？　鞄置いただけでぐらぐらする

し、良く見たら天井クモの巣はってる！」
「先ほどから、隙間風が酷いのう。それに埃っぽいから、喉に悪いぞい」
「ほんとと最悪だニャー」

殆ど廃屋同然の教室、腐った畳、綿のない座布団、足の折れた卓袱台、隙間風が吹くツギハギの窓。
最低の中の最低ともいえるカビ臭さ満載の空気に、改めて顔をしかめる一真と明久と当麻。

「まあそれはそれとして、今年一年もよろしく頼むぞい」
「ああ、こちらこそ今年もよろしく。やっぱ付き合いが長く、気の合う幼馴染って良いもんだな、秀吉」
「いいにゃーそういう関係」
「そう言ってくれて何よりじゃ。姉上も一緒なら、もっと面白かったのじゃがな」
「冗談言うな。あいつと一緒だなんて、考えただけで怖気がする」
「にゃはははは」

秀吉と幼馴染だけに、彼の姉である木下優子とも当然幼馴染という間柄であり、面識はあった。
が、彼は秀吉とは親しい物の、優等生で何かと衝突しやすい優子を苦手としている。

「改めてみると、酷いよね？」
「ああ。Ａを見ただけに、格差があまりにもひどすぎる……そういえば秀吉、優子はＡクラスなのか？」
「姉上はワシと違って、優秀じゃからのう。なんじゃ、姉上が気になるのか？」

「そりゃあ……あいつには散々怒鳴られてるから、同じクラスだったら気が気でならないよ。何より本性知ってるだけあって、ろくでもない事になるのは目に見えてるし」
「多分、朱里もだニャー」
「素直じゃないのう」
と、笑う秀吉に一真は懐に手を入れて、ある物を取り出そうとした。
「ねえ一真、本性って？」
……が、そこで興味津々で質問してきた明久に、一真は一旦手を止めてにやりと笑みを浮かべた。
それはだな……と切り出そうとした一真を、秀吉が沈痛な顔で制した。
「やめておけ一真。以前その事で、全身の関節が壊れる寸前にされたの忘れたか？」
「……すまん明久、俺の命の為にも忘れてくれ」
「え？　それって……よくわからないけど、一真も苦労してるのかな？」
「その通り」
明久も通じるものがあったのか、すんなりと頷いた。
話が終わった処で、一真は持ってきている学生かばんを開き、そこからエアガンを取り出す。
もちろんマシンガンやライフルと言った、そういう大型の物を。さらに学ランの中から改造トンファー、ポーチからスタンガン、腰のベルトからナイフを取り出した。当麻も同じように自分の武器を出している

「さて、先生が来るまで武器の点検でもするかな？」
「同意見だニャー」
「海外ならともかく、日本で堂々とやる事じゃないのう」
「別に改造してる訳じゃないんだから、年齢制限やらを守れば問題ない」
「当麻さんは、ナイフとスタンガンと薬品だから問題ないにゃー」
「さっきそれを人に向けた者の言うセリフじゃないぞい、しかもトンファーは改造じゃろうて」
「良いんだよ秀吉、どうせ雄二なんだから。一真の改造は・・・・ごめんフォローできない当麻はいうことが無いけど」
「明久、ちょっと来い」

ガラッ！

「ＨＲを始めますので、席についてください」

そこで、初老のさえない男性教師が入ってきて、全員が席に着く。
こうして、文月学園の学生生活が始まった。

第3話　天才！問題？五人組！！（前書き）

問題

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を1つあげなさい』

姫路瑞希、大神祐輝の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応するため危険であるという点

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので鉄ではダメと言うひっかけ問題なのですが、姫路さんと大神君は引っかかりませんでしたね。

神竜一真の答え

『問題点……鍋を自分で作ろうとする馬鹿の浅はかさ、デパートに買いに行け』

合金の例……作る必要が無いからなし』

教師のコメント

問題なのでそこに突っ込まないでください。

土屋康太の答え
『問題点……ガス代を払ってなかった事』
教師のコメント
そこは問題じゃありません

吉井明久の答え
『合金の例……未来合金（↑すごく強い）
教師のコメント
すごく強いと言われても

破神当麻の答え
『一真と同じ』
教師のコメント
自分で考えなさい

第3話　天才！問題？五人組！！

第2話

天才！問題？五人組！！

2年Fクラス、初日のＨＲ

「えー、おはようございます。Fクラスの担任を務めます……」

担任らしい教師は、薄汚れた黒板に視線をやり手を伸ばそうとして……視線を皆の方に戻した。

「福原慎です。よろしくお願いします」

「「「チョークすらないんかい！！！！！」」」

「後で申請しておきますので、授業には間に合うはずです」

全員が改めて、ここが最悪の環境であることを実感した。

「皆さん全員に、卓袱台と座布団は支給されてますか？　不備があれば、申し出てください」

不備という言葉に、全員がありまくりと言わんばかりに名乗り出た。

と言うより、どこが完備されてるのかむしろ聞きたいと言わんばかりに。

「俺の座布団、綿が入ってないんですけど」

「我慢してください」
「俺の卓袱台、脚が折れてます」
「木工ボンドが支給されてるので、後で自分で直してください」
「窓が割れてて、隙間風が寒いんですけど」
「ビニール袋とセロハンテープを申請しておきますので、後で直してください」

1つ1つの質問を丁寧に応えていく福原教諭。
しかし大半が大きく分けて“我慢してください”か、“自分で何とかしてください”の2択のみ。

重ねて言うが、ここは学力最低クラスのFクラスの教室である。

「では必要なものがあったら、極力自分で調達する様にしてください」
「これがFクラスか……」
「面倒だニャー」
「それじゃあまず自己紹介からしましょうか」

と言われ、まずは廊下側の一番最後に座っている秀吉が立ち上がった。

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる。今年1年、よろしく頼むぞい」

とても男とは思えないその可憐な姿に、男で埋め尽くされたその空間は癒しの空気に包まれた。
余談だが、その容姿から“女装が似合う男子生徒ランキング”から不公平の意見が多数出たため、候補から外されたという話あり。

「……土屋康太」

次にムッツリーニ事、土屋康太。
本名は知られておらず、異名であるムッツリーニの名は割と知られている存在である。

「大神祐輝です。海外にいっていて振り分け試験が受けられなかったので無得点扱いでこのクラスにきました。よろしくお願いします。」

次に超絶イケメンの大和大輝、全員が何故いるのかと言った顔をしたが、ちゃんと理由を言ったのでわかった。後こいつは、NOリア充の敵妻帯者だ。

「島田美波です。海外育ちで日本語は会話はできるけど、読み書きが苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は……」

一旦区切り、明久をちらりと見てから一言。

「吉井明久を殴る事です」

当人は先ほど受けた4の字固めのダメージが再発したのか、膝を抑えガタガタ震えていた。
そのあとは、ただ単に名前を告げるだけの作業が進んでいく。

「破神当麻だにゃー、そこの一真とはサッカー日本代表で一緒だニャー、あと水野朱里と幼馴染だニャー」
『水野朱里だとお！！！』
「そこの一真と祐輝のほうがひどいにゃ今年一年よろしくにゃ～」

そうやって当麻の自己紹介が終わる。めんどくさい振り入れやがってと思いながら一真はせきを立つ

「神竜一真、現サッカーU22日本代表、そこの木下秀吉とは幼馴染で破神当麻とは代表仲間」
「まあそれなりに仲良くさせてもらっておるぞい。姉上共々な」
『木下優子とだとお！！？』

木下優子と言えば、秀吉と瓜二つの双子であり、現在Aクラスに所属する優等生。ちなみに水野朱里もだ。
ほぼ全員が一真と当麻に対してカッターを構えるが、一真が学生かばんからマシンガン（エアガン）を取り出し、木刀を手にし、学ランの中を見せる。当麻は手にマジもののナイフを持っている

「ちなみに武器が好きで、ていうか中学の少しだけイタリアにいてマフィアのボスをやってました。刑務所にぶち込まれた経験もあります。今は違いますけど」
「俺はただの武装趣味だニャー」
「いや、お前俺の側近だろ」
「とんでもない事をサラリと言うでない二人とも」
「どんだけ周りが心配したと思ってんの？」
「ちなみに秀吉とは親友ではありますが、こいつの姉木下優子とは他人以上知り合い未満程度ですので、誤解のない様お願いします」
「俺はちょっと違うけど恋愛対象じゃないニャー」

元マフィアのボスで武装しているとなると全員が萎縮してしまった。先ほどのやり取りもあってか本気で殺されかけない、と全員が本能で察知し、逆らわないことを誓ったのは別の話。

「まさかと思うけど、それ本物じゃないよね？」
「きまってるだろ、ここ日本だぞ？銃は偽者だ！　それより明久、次はお前の番だぞ？」
「あっ、そうだったね」

次は明久の番となり、軽く咳ばらいをした。
彼は出だしが肝心だと言わんばかりに、気さくにふるまう事に。

「え～っと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね♪」

『ダァアーーリィーン！！』

男らしい野太い声の大合唱が、Ｆクラスの教室に響き渡った。
当然明久はめちゃくちゃ笑顔をひきつらせ、混ざらなかった秀吉と一真と当麻も苦笑い。

「……失礼、忘れてください。とにかく、よろしくお願いします」
「なんつー不快な大合唱だ」
「確かに、当事者でないワシも鳥肌が立ったぞい」
「さすがの俺でも嫌になったぜい」

ガラッ！

「あの、遅れて、すいま、せん……」

「えっ？」

そこへ、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れた。
その姿に、男子生徒全員が意外を通り越したかのように驚いた声が上がる。

「ちょうど好かったです。今自己紹介をしているところなので、姫路さんもお願いします」
「は、はい！　あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願いします！」

途中から尻すぼみな自己紹介を終えて、小柄な体を縮み込ませた。

「はいっ、質問です！」
「あ、はいっ。なんですか？」
「何でここにいるんですか？」

傍から見れば失礼な質問ではあったが、ほぼ全員（一真と明久と当麻と雄二を除く）がそう思っていた事だった。
彼女は容姿も人目を引く程で、テストでは１ケタの順位に必ず名を連ねている学力の持ち主でもある。（まあ一真には勝てないが）
当然こんな場所に来るべき人間ではなく、最高設備であるＡクラスに入っている物と誰もが思う事。

だからこそ、この質問はある意味必然なものだった。

「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして……」

ＡからＦまでのクラス分けは、学年末に行われる振り分け試験で決

まる。
その試験は難しいという評判だが、途中退席は0点扱いにされるという厳しいテストである。もちろん受けて無くてもおなじである
「そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」
「ああ、化学だろ？　あれは難しかったな」
瑞希の言い分を聞いて、1人がそう言いだした。
それを皮切りにざわつき始め、次の言い訳が飛び交う。
「俺は弟が事故に遭ったと聞いて、実力を出し切れなくて」
「黙れ1人っ子」
「前の番、彼女が寝かせてくれなくて」
「今年一番の大嘘をありがとう」
その様子を見て、一真は一言。
「……想像以上にバカが多いみたいだな」
それを聞いて、明久と秀吉さらに当麻までうんうんと頷いた。
「で、ではっ、今年1年よろしくお願いします！」
瑞希は逃げるように、明久と雄二の間の空いてる席に着いた。
彼女は席に着くや否や、安堵の息をついて卓袱台に突っ伏してしまう。
その姿に一真は明久と当麻に目配せをして、あの事を聞くことにしたと意思表示。

「よう姫路、さっきの自己紹介だが、体調は大丈夫か？」
「あっ、神竜君に破神君に……よ、吉井君！？」
一真の声に反応して振り向いた先の明久の顔を見て、瑞希が驚いた。
その反応に、明久は何かまずかったかとおろおろし、一真はその様子からある事を察した。
「姫路、明久が不細工ですまん」
が、そこへ雄二が割り込んできた。
それも明久への罵倒込みで。
「そ、そんな……えっと？」
「坂本だ、坂本雄二。それよりこのバカの顔を見て、体調が余計に悪くなっただろ？　友として謝っておく」
「友が言うセリフに聞こえないぞ？　それより何いきなり割り込んで来てんだよ？」
「俺も一真と同意見だニャー」
「代表としてクラスメイトを気遣って何が悪い？」
表情が“明久の幸福を邪魔する為だ”と言っていた事は、当然一真も当麻も察していた。
ちなみに明久は、その罵倒で悲しそうな顔をしている。
「そっ、そんな事より、吉井君は全然不細工ではありませんよ？」
「え？」
「目もパッチリしてるし、顔のラインも細くてきれいだし、その、むしろ……」
「まあ確かに、悪くはないかもな。そういえば、俺の知人にも明久に興味がある奴が居た気がする」

雄二のその言葉で明久は嬉しそうに、瑞希は驚いて、一真と当麻はまさかと言った様な表情に。

「え？　それは……」

「そっ、それって一体誰ですか！？」

明久の声を遮るかのように、瑞希が声を荒げた。
それも必死そうな表情のオマケつきで。

「姫路、落ち着け。身体に障るぞ？　しかし、随分と必死だね？」

「え？　そっそれは……」

「ははっ、姫路さんも色恋沙汰には結構敏感なんだ？」

「そっその……はい。やっぱり恋をするって素敵な事だと思いますから、つい力が入ってしまって」

明久が微笑ましそうに瑞希を見て居る傍らで、雄二と一真と当麻は半ば呆れたように明久を見ていた。

「ねえ雄二、話の続き聞かせてよ？」

「え？　ああ、そうだな。確か、久保……利光だったか？」

「男かよ！」

久保利光　性別（♂／オス）
現在Ａクラス所属　学年次席

「おい明久、さめざめと泣くな。当麻声を殺して大笑いすんな」

「いや、よりにもよって男に恋愛感情持たれてるかも知れないなんて、普通こうなると思うぞ？」

「当麻は失礼にも程があるが…」

「……まあ、確かにな」

パンパン！

「はいはい。そこの人たち、静かに」

バキィッ！　パラパラパラ……

「してください……ね？」

本人としては、軽くたたいたつもりだろう。
だが、壊してしまった事は事実の為、少々気まずそうな態度に。

「え～。代えを持ってきますので、皆さんは自習をしていてくださいね」

「どんだけ酷い設備なんだよ！？」

「これがFクラスです」

福原教諭の台詞に、何度目かの改めて設備のひどさを理解させられる面々だった。

「「全く、こうも埃っぽい上に湿気だらけじゃ、俺の大事なコレクションも痛んじまうな（にゃー）」」

「きゃっ！」

一真と当麻が取り出した武器の数々を見て、瑞希が軽く悲鳴を上げた。
まあ普通、一介の学生の荷物から武器（しかも超危険）が出てくる事自体非常識の為、無理ないかもしれない。

「ん？　ああ、これ、殺傷能力あんま無いよだよ。俺こういうの好きだから」
「俺は死なない程度にやってるニャー」
「そうなんですか？」
「それより振り分け試験の時、大丈夫だったか？　あれから明久が酷く心配しててさ」
「吉井君が……ですか？」

明久と瑞希は振り分け試験の時隣の席で、一真、当麻も明久から事情を聞かされていた。
その為一真も当麻も瑞希の事情は知っていたし、明久の瑞希に対する気も当然気づいていた。

「うん。体調が悪そうだったし、いきなり倒れるからびっくりしたよ。保健室に様子を見に行った時には、もう帰っちゃってたからさ」
「何だ、お前らだけ驚いてないと思ったら、そんな事があったのか？」
「ちょットびっくりだね」
「うん……ねえ雄二、ちょっと良い？」
「あ？」

明久は雄二を伴い、廊下へ。
瑞希が怪訝そうな顔をして見送り、一真に問いかけた。

「吉井君と坂本君、どうしたんでしょうか？」
「何だ、明久が気になるのか？」
「え？　いっ、いえ、そういうわけでは……」
「はいはい。まあ俺で手伝えることがあるなら言いなよ、協力してやるから」
「え？　あの、あっ、ありがとうございます」

一真と当麻それと祐輝は2人が出て行った廊下をちらりと見て、すくっと立ちあがる。
秀吉はそれを見て、幼馴染特有の勘を働かせた。

「なんじゃ、またお主ら5人で悪だくみかの？」
「まあな。ちょっと面白い事になりそうだ」
「俺は面白かったら何でもいいニャー」
「僕は一真が一緒ならなんでもする。」
「やれやれ……まあお主らしいのう」

たがいに笑いあって一真達は気取られない様廊下へ。
そしてゆっくりと建て付けの悪い扉を開いて……

「つまり、姫路の為だろ？」
「そっそういう訳じゃないけど……でも、姫路さんには酷い環境だから、改善してあげたいって気持ちはある」
「素直じゃねえな。まあどうせ、試召戦争はやるつもりだった。世の中学力こそがすべてじゃないって事、その証明がしてみたくてな」

それを聞いて、一真達はこそこそするのをやめにして、思いきり戸を開けた。

「何だ？　俺を差し置いて、随分と面白そうな話をしてるじゃないか。俺もやらせろよ！天才の銀はがし！！」
「そんな面白い話なんで俺を誘わないかニャー」
「僕も力になるよ！」
「一真、当麻、祐輝！」
「俺達にも一枚かませろよ。そんな面白そうな話、この俺達が乗らない訳ないだろ？」

明久はそれを聞いて感激し、雄二も不敵な笑みを浮かべた。
「全く、お前らも物好きだな……っと、先生が来た。入るぞ」
「それじゃFクラス代表のお手並み、拝見と行こうか？」
「ああ、任せておけ」

一真達は、雄二に向けてグッと親指を立てた。
雄二もそれに倣い、同様に親指を立てる。

「それより明久、試召戦争を提案したからにはお前も頑張れよ？」
「うっ……」
「ちょっと酷すぎないかい？雄二」
「まあそれぐらいしないと駄目だニャー」
「“あの事”があるから無理ないか……じゃあさ、俺とコンビ組まないか？」
「改めて言うが、お前も物好きだな。明久とコンビを組みたがるなんて」
「その方が色々と面白そうだから良いんだよ、俺と明久は相性がいい」
「まあそうだね一真と明久は相性がいいから」
「俺達は二人にくっついて動くニャー」

吉井明久、坂本雄二、神竜一真、破神当麻、大神祐輝。
この後、文月地区で知らぬ者なしと言われる程の問題児組として、一躍名を轟かせる事になる
その第一歩が今踏み出された事は、五人の中、誰一人として気付く事はなかった。

第４話　マフィアは戦争には巻き込まれる（前書き）

この間この小説にはじめて感想が来て、感謝感激です！

第４話　マフィアは戦争には巻き込まれる

第４話

マフィアは戦争には巻き込まれる

問題

以下の意味を持つことわざを答えなさい

（１）得意な事でも失敗してしまう事

（２）悪い事があったうえに、更に悪い事が起きる喩え

姫路瑞希、大神祐輝の答え

（１）弘法も筆の誤り

（２）泣きっ面に蜂

教師のコメント

正解です。他にも（１）なら“河童の川流れ”、“猿も木から落ちる”、（２）なら“踏んだり蹴ったり”や“弱り目に祟り目”などがありますね。

神竜一真の答え

（１）サルを木から叩き落す

（２）弱り目に日本刀

吉井明久の答え
（2）泣きっ面蹴ったり
破神当麻の答え
（1）河童の島流し

教師のコメント
君たちは鬼ですか、

土屋康太の答え
（1）弘法の川流れ

教師のコメント
シュールな光景ですね

「Fクラスは、Aクラスに“試験召喚戦争”を仕掛けようと思う」
壇上に自己紹介の為立った筈の雄二の、いきなりの提案。

それに対し、クラスメイト達は当然非難轟々の嵐を巻き起こした

「勝てるわけがない！」

「これ以上設備が落とされるなんて嫌だ！」

「姫路さんが居たら何もいらない！」

選りすぐりのバカだからこそのＦクラスが、逆の意味での選りすぐりのＡに戦争を仕掛ける。

試召戦争は負ければ設備を１ランク落とされるのだから、更に最低になる事を考えれば自殺行為に当たるそれに、非難の嵐が吹き荒れるのは当然だった。

だが雄二は、その非難の嵐に怯む事もなく、代表らしい堂々とした姿を崩す姿勢が見られない。

ある程度治まった処で、不敵な笑みを浮かべ口を開く。

「皆がそう思うのも無理もない。だがこのクラスには、勝てる要素が揃っているからこその発案だ。今からそれを説明してやる」

自信に満ちたその発言に、クラスはしんと静まった。

不敵な笑みを崩さないまま、雄二はある個所に視線を向けた。

「おい、康太。いつまでも姫路のスカートの中をのぞいてないで、前に出てこい」

「……！！（ブンブン）」

「は、はわっ！」

恥も外聞もなく、低姿勢からの覗きこみの体勢を指摘され、必死に顔と手を振って否定し始める少年。

顔に付いた明らかな覗きの証拠を隠しつつ、前に出ていく。

「紹介しよう。こいつがあの有名な沈黙なる性職者ムッツリーニだ」
「……！！（ブンブン）
ムッツリーニと言う名に、クラスがざわめいた。
その名は男子から畏怖と畏敬を、女子からは軽蔑を持ってあげられており、その正体は謎。
……とされていた人物が、今目の前にいる。
「バカな、奴がそうだと言うのか？」
「だが見ろ、いまだ必死に手で押さえて隠そうとしてるぞ？」
「ああ、ムッツリの名に恥じない姿だ」
ただ1人、瑞希だけは頭に疑問符を浮かべていた。
「姫路と大神の事は説明するまでもないだろう。皆だってその力は知ってるはずだ」
「えっ？　わっ、私ですかっ！？」
「うんがんばるよ絶対に」
「ああ、主戦力だ。期待している」
その容姿と共に知られている彼と彼女の成績を考えれば、もっともな話である。
「そうだ、俺達には姫路さんに大神が居るんだった！」
「彼女なら、Ａクラスにも引けを取らない」
「ああ。彼女が居れば何もいらない大和は消えて欲しいが」
「木下秀吉だっているし、俺も当然全力を尽くす。」
次に、学力ではあまり聞かない物の、優等生である双子の姉と演劇

部のホープという要素で有名な人物。
そして自身もまた、代表として名乗りを上げた。
「坂本って、確か小学生のころは神童とか呼ばれてなかったか？」
「それじゃあ、実力はＡクラスレベルが２人も居るってことかよ？　もしかしたら、やれるんじゃないか？」
「ああ、なんかやれそうな気がしてきた！」
士気は確実に上がっていき、ほぼ全員やる気が出始めて来た。
そこへ雄二の一言
「それに、“孤独の死神”神竜一真と“参謀”破神当麻と吉井明久、このトリオが居る」
『ギャアアアアアアアアああアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア』
悲鳴が木霊した。
「神竜って……あの学園の過激派筆頭って話の！？しかもその参謀、破神当麻も」
「元学年主席でサッカー日本代表、元マフィアのボス、さっきのときに気づけば良かった。」
「ああ。マフィアからまたやらないかとスカウト来てるって話だろ？破神もろとも」
「けど、吉井明久って誰だ？　神竜とコンビってことは、相当な悪人ってことじゃないか？」
先ほどとは違う意味でざわめき始めた。

「ちょっと雄二！　どうしてそこで全く関係ない僕の名前を呼ぶのさ！？　しかもなんか、変な設定までつけられてるよ！！？」
「神竜と破神の事は知っているみたいだから良いとして、明久を知らないなら教えてやる。こいつは“観察処分者”だ」
「……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？」

誰かのその発言は、明久の心に深く突き刺さった。

「ちっ違うよっ！　ちょっとお茶目な１６歳につけられる愛称で……」
「そうだ、バカの代名詞であり、一真と当麻と祐輝の腰巾着同然の雑魚だ。ハンデにはちょうどいい」
「肯定するな！　それに自分から降っておいて、そのセリフはないよね！？」
「まあ落ち着け明久。これから挽回してけば良いだろ？」
「そうだニャー」
「っま、がんばろうよ明久。」

一真と当麻と祐輝になだめられ、一先ずはと席に着く明久。
それに構う事なく、政治家の演説を思わせるような堂々たる態度で言い放った。

「とにかくだ！　俺達の力の証明として、まずはＤクラスを征服したい。皆、この境遇は大いに不満だろう！？」
『当然だ！』
「ならば全員筆を執れ！　出陣の準備だ！」
『おおーーーっ！！』
「俺たちに必要なのは、卓袱台ではない！　Ａクラスのシステムデスクだ！」
『うおおーーーっ！！

「お、おー……」

雰囲気に押され、瑞希も懸命さが見て取れるように小さく拳をふりあげる。
その姿に明久が和んでる所に、雄二の一言。

「明久には、Dクラスへの宣戦布告の為の死者になって貰う。無事大役を果たせ！」
「……下位勢力の宣戦布告の使者って、大抵酷い目に遭うよね？しかも今字が違わなかった？」
「大丈夫だ、だまされたと思って行ってみろ。俺は友人を騙す事はしない」
「わかったよ、それなら使者は僕がやる」

下位勢力との試召戦争など、面倒でしかない。
だからこそ、そんな面倒事を持ってくる奴に危害を加えない訳がないだろう。

結局雰囲気に流され、明久は意気揚々と出ていった。
ある程度時間がたったところで、雄二が一言。

「とまあ、ああいうバカだ。皆も危なくなったら、あいつを囮にしてさっさと逃げるように」
「やっぱりか……仕方ない、俺も行ってくる」
「俺もいくニャー」
「僕も行こう」
「お前らも物好きだな」
「お前が酷過ぎるだけだ」

数分後

「騙されたぁっ！！」

そのしばらくの後、明久が教室に転がり込んできた。
Dクラスにつかみかかられ、ぼろぼろになった姿を見た雄二は一言。

「やはりそう来たか」
「やはりって何だよ、使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！　一真達が来てくれなかったら、今頃どうなってたと思ってるんだ！？」
「それ位予想できないで、代表が務まる訳ないだろ」
「少しは悪びれろよ！！」
「まあ落ち着けよ。こいつが酷いのは今に始まった事じゃないだろ？」

そこへ木刀とトンファーを持った一真、ナイフとスタンガンの当麻、一真に借りたエアガンの祐輝が戻ってきて、明久を宥めた。
明久と違い無傷のその姿に、雄二は一言。

「殺してないだろうな？」
「問題ない。コレクション見せれば、大抵の奴は怯える」
「やりたかったニャー」
「これは思わぬ収穫だな。生贄ではなく、お前を行かせるべきだったか？」
「生贄って言った！？　今生贄って言ったな！！？」

内容を考えたら、当然の表現である。

「吉井君、大丈夫ですか？」
「大丈夫、吉井？」

制服までぼろぼろにされた明久に、瑞希と美波が駆け寄った。

「あ、うん。平気だよ、心配してくれてありがとう」
「そう、良かった……ウチが殴る余地は、まだあるんだ」
「ああっ！　もうダメ、死にそう！！」

冗談と分かっていても、一真達はその言葉に戦慄を覚えた。
そしてうめき声を上げ始めた明久に、手を差し伸べる。

「……ほら、立てるか明久？」
「え？　うん、ありがとう」
「そんな事より、今からミーティング行うぞ？」

と言う雄二の言葉に従い、主要メンバーは屋上へ。

そして、屋上にて。

「で、明久。時間は伝えたのか？」
「うん、今日の午後からって伝えといた。だから先にお昼ご飯だね？」
「じゃあ明久、今日くらいはまともな飯食えよ？」
「そう思うなら、パンでもおごってくれると嬉しいな？」

彼、吉井明久は生活破綻者である。
彼は1人暮らしであり、親からの仕送りを元手に生活しているが……仕送りを後先考えず趣味に費やす為、本人いわく“清貧生活”を

送っていた。

「あれ、吉井君ってお昼食べない人なんですか？」
「いや、一応食べてるよ？」
「水と塩、もしくは砂糖じゃ食べるとは言わん。全く……ほれ」

一真は取り出したパンを、明久に投げ渡した。
それを見て、明久は表情を輝かせる。

「賞味期限切れだけど、良いか？」
「あっ、うん。食べられるなら」
「お前、明久の奥さんみたいだな？　何かと世話焼いてる事と言い」
「それは身近にズボラが……」
「一真よ、その先はならん！！」
「そうだにゃー、俺もひどい目にあったニャー。」
「大変なんだね君達も……」

一真が口を滑らせようとしたところで、秀吉、当麻の制止が入った。
そしてそれを哀れむ祐輝
その事に気づいて、ホッと胸をなでおろした。

「……そっそうだったな。すまん秀吉、助かった」
「ズボラが、どうかしたのか？」
「いや、何でもない。それよりさっさと食っちまおう」
「そっそうだにゃー」
「そっそうじゃ。戦争に向けて、力をつけねば！」

多少不自然そうに、一真と秀吉と当麻は話をそらした。
その姿に疑問符を浮かべるも、皆は食事に。

明久は一真からもらったパンを、少しずつ味わい噛みしめていた。
「久しぶりに固形物を食べるって、幸せだね……」
「全く……彼女でも作って、生活全般を管理してもらった方が良いんじゃないか？」
「一真が管理してやれよ。明久みたいなバカに彼女なんて無理だろ」
「雄二、せめて即答で言わないで！！　……ううっ、何だか変わった味だね？」
「いや、それお前の血の味だ」
色がドス黒いのは、明久が血の涙を流しているからである。
ふと一真が瑞樹に視線を向け、瑞希が何か決心した様な表情をするのを見て、ほほ笑む。

「……あの、良かったら私が、お弁当を作ってきましょうか？」
「ゑ？　……ほっ、本当に良いの！？」
「はい。明日の昼でよければ」
「へぇっ、良かったじゃないか明久。女子の手作り弁当なんて、殺したい位羨ましいぞ」
「一発殴らせるニャー」
「うん！　……でも、後半が全然笑えないよ？」
冗談だとは分かっていても、一真と当麻だからこそ笑えない明久だった。

「ふーん。瑞希って、随分優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」
「あ、いえ！　その、皆さんにも……」
「え？　俺達にも？　いいのか？」
「はい、嫌じゃなかったら」

女の子の手料理を断る外道など居る訳もなく、全員が喜んだ。
作る当人は、９人分となると大変なのに、嫌な顔一つしない。
その様子に明久は、再度彼女に再度関心の視線を向けていた。
「それじゃ雑談はそこまでにして、そろそろ本題に入らないか雄二」
「ん？　ああ、そうだな」
「気になっておったのじゃが、なぜＤクラスなのじゃ？」
まず真っ先に、秀吉が疑念をぶつけた。
それもそのはず、段階を踏んでいくならＥクラスが妥当であり、目的はＡ。
「簡単だ。姫路に問題がない今、Ｅなら正攻法でも勝てるが、Ｄクラスは難しい。それに初陣だから派手にやって景気つけたいし、Ａクラス攻略の為に必要な要素がＤクラスにはある」
「成程。つまりこれは、最初のステップってわけだな？」
「ああ。ここにいるメンバーは最強だ、お前達が俺を信じて協力してくれるなら勝てる！」
雄二の確信した表情による言葉に、全員が頷いた。
そして一真と明久、当麻と祐輝は、拳を打ち合う。
「それじゃやるか、明久」
「うん！　僕達コンビの力、見せてやろう！」
「代表として、頼りにさせてもらうぞ。一真と祐輝たちのコンビだけ！」
「ひどい！！」

Dクラス　VS　Fクラス
今年度初の試験召喚戦争が、幕を開ける

「ほぉ～っ、今年の2年は1学期初日から試召戦争やろうってのかい？　面白いじゃないか、承認してやりな」
「承知いたしました」
「さて、どうなるかね？　見せて貰おうじゃ……ん？　Fクラスと言えば、例のガキどもが居るクラスかい？」
「はい。吉井明久、神竜一真、破神当麻、大神祐輝、坂本雄二……“観察処分者”と、その候補達です」
「そうかい、それはますます面白そうじゃないか……見せてもらうよ、ガキども」

第４話　マフィアは戦争には巻き込まれる（後書き）

この調子で連ちゃん投稿いっきま～ス。

第5話　死神マフィアの力（初級）（前書き）

連ちゃん投稿どこまで続くか！

第5話　死神マフィアの力（初級）

第５話

死神マフィアの力（初級）

問題

以下の英文を訳しなさい

『Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｂｏｏｋｓｈｅｌｆ　ｔｈａｔ　ｍｙ　ｇｒａｎｄｍｏｔｈｅｒ　ｈａｄ　ｕｓｅｄ　ｒｅｇｕｌａｒｙ.』

姫路瑞希、大神祐輝の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です。祐輝のみ（僕もふざけたい）』

神竜一真の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です（真面目に久々に書いた）』

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

しかし、神竜君は素直に喜べないのはなぜでしょうか？大神君変わらないでください。

土屋康太の答え
『これは』

教師のコメント
訳せたのはＴｈｉｓだけですか

吉井明久の答え
『☆●◆▽♪＊ー　ー』

教師のコメント
出来れば地球上の言語で。

破神当麻の答え
『一真に任せるニャー』

教師のコメント
君は神竜君に依存しすぎです

試験召喚戦争　Ｄクラス対Ｆクラス

「よし、Ｆクラスの…げっ！　あれは、さっきの！　まさかあいつ、やっぱ神竜一真と破神当麻に大神祐輝か！？」

「うっ、ウソだろ！？　何であいつらが先陣なんだよ！？」
「くそっ、騙された！　そうだとわかってたら、中堅に回ってたのに！！」

Dクラスと Fクラスの先遣部隊の衝突。
……だがDクラス先遣部隊は、その先頭に立つ少年達の姿に怖れ、即座にパニックに陥ってしまう。

「すごいね。一真と当麻の姿を見た途端、皆動揺しちゃってるよ？」
「「「このどこから見ても立派な青少年に対して失礼な……」」」
「普通どこから見ても立派な青少年は、武器を持ち歩かんと思うのじゃが」

その後ろに従えるは、彼らの相棒の吉井明久と幼馴染の木下秀吉。
先遣隊長を買って出た一真は、手を掲げて号令を。

「よし、やるぞ！行くぞ野郎共！アーユーレディ？」
『イエ～ィ！！』
「うっし、ヒューウィーゴー逝け！！！」
『レッツパーリィッ！！！おっしゃーーーー！！！！』
「くっ……ひっひるむな！　所詮はFクラスなんだ。俺達はDクラス、勝てるぞ！！」
『おっ……おお！』
「さあ、Dクラスの諸君！楽しんでいこうぜ！」
「Fクラスのみんな負けても大丈夫だから楽しんでいこう！」
「全員まとめてぼこぼこニャ！」

向こうも先遣隊長が負けじと、号令を上げるが……

やはり、尻込みしてしまい意気消沈。

「では、始めてください」

学年主任の高橋女史の立会、彼女を中心に召喚フィールドが展開される。

先陣を切ったのは、Ｆクラス

「Ｆクラス先遣隊隊長神竜一真、行くぞ！　召喚獣召喚、サモン！」

一真の足もとに幾何学的な図形が現れ、その後に召喚獣が現れた、改造学ランにサッカースパイク手にはガンブレードのデフォルメ一真。

「やっぱり一真のって、サッカースパイクにゲームのような武器なんだねなんだね？」

「俺と言えばサッカーと二次元と殺人武器だ。それ以外が出たら、召喚システムの方に欠陥があると断言できる」

「神竜君、問題発言……」

「よし、一真に続くぞ！　吉井明久、出る！」

「さらにいくニャー破神当麻出る！」

「僕も行こう、大神祐輝いっきまーす！」

高橋女史の声は、即座に明久達にかき消された。

続いて全員が召喚獣を次々と召喚。

「くっ……ひっひるむな！　相手は所詮はＦクラス、俺達Ｄクラスなら敵じゃない！！」

尻込みしているのがわかる先遣隊長の号令で、Dクラスも応戦。
まず1人が、一真の召喚獣めがけて襲いかかった。

「神竜一真、その首もらったあ！！」

その召喚獣に一真の召喚獣はまずガンブレードを構え、柄の引き金をゆっくりと引いた。
放たれた弾丸は敵召喚獣の腕を弾き、武器を落とした所をすかさず左手に握られたガンブレードを構え、何発も撃ちこむ。

「そっそんな……！？」
「お前らはミスをした。俺の弾丸は必ず当たる」

そのままラにより敵召喚獣は持ち点0となって消えていった。
それと同時に

ドンっ！！

と言う効果音を上げて現れるは、チンパンジー……もとい、生徒に畏怖をもって“鉄人”称される漢。
補習室の暴君にして、生活指導の鬼と呼ばれる西村教諭の姿。

「てっ鉄人！？」
「戦死者は補習室へ集合！！」

先ほど一真にやられた召喚獣を操る生徒が、あっという間に担がれてしまった。

「さあ来い、この負け犬が！！」
「いっ、嫌だ！　鬼の補修は嫌だあああああ！！」

「安心しろ。“趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎”と言う、立派な模範生に仕立て上げてやる！」
「たっ助けて！！　誰か……助けてええええええ！！！」
死に物狂いで逃げようとするも、びくともせず。
そのままその生徒は、補習室へと連行されていった。
その場に残った、自身にも起こりうる最悪の未来……その戦慄を残して。
「哀れな……じゃが、これは戦いじゃ。躊躇えば、次は我が身やも知れん」
「じゃあ俺のは遠距離型に変えるから、後方援護に回る。明久と秀吉と当麻は俺のガードを、皆は大輝を中心に今のうちに各個敵をたたけ！」
「あっ、ああ。よし、やれるぞ！」
「神竜たちが居れば、おそるに足らずだ！！」
「よしお前ら楽しんでいけ！！！」
『イェッサーマイボス！！！』
一真の号令と活躍で一気に士気が上がった傍らで、犠牲者が出たDクラスはいきなり動揺。
それもそのはず、一歩間違えばああなっていたのは自分かもしれないのだ。
「なっ、なあ……逃げないか？」
「そっそうだよ！　あいつと戦う位なら、俺もうFクラスの設備でいい！　鬼の補修が確定されるなんて嫌だ！」
「そうよ！　あんなのがFにいるなんて、聞いてないわよ！！」
「だっ、だったら誰か、五十嵐先生と布施先生を呼べ！　確かにあ

いつは恐ろしいが、所詮はＦクラスなんだ。消耗させれば後はこっちの物だ！」

召喚獣は、召喚者が最後に受けたテストの点数で、強さが決まる。
そして消耗に応じて点数が減っていき、０点になれば戦死。
他にも細かなルールはあるが、ここでは割愛。

『神竜一真　総合科目４９５６点』
『破神当麻　総合科目２９２０点』
『大神祐輝　総合科目４８７１点』

「流石、すごいのう。まるで熟練の技じゃ」
「秀吉、俺を誰だと思ってる？　それより中堅部隊を何人か呼んでくれ。明久、当麻お前達は俺のガードだ」
「うん、わかった」
「任せるのじゃ」

明久も召喚獣を出し、秀吉はいったん後退。
ふと、秀吉が立ち止った。

「そういえば一真」
「ん？　何だ秀吉？」
「何故、明久とのコンビなのじゃ？　成績や付き合いで言えば、ワシの方が上、コンビネーションじゃと当麻や祐輝じゃというのに」
「俺の召喚獣の特性と、明久の“観察処分者”の利点……まあそれは、すぐわかるか」

Ｆの兵隊を倒した敵召喚獣が、一真の召喚獣めがけて襲いかかってきた。

「よし、もらった！！」
「明久、頼む！」
「ええ！？　……援護は頼むよ！？」

それを、改造制服に木刀と言う装備の明久の召喚獣が食い止めた。
敵召喚獣が、そのまま力押しで押し切ろうとしたところで……

「明久」
「うん」

明久が受け流し、敵召喚獣が体勢を崩したところで一真の召喚獣がガンブレードを構える……。

「鉄人、補習室1人追加でーっす」
「一真決め台詞言っちゃってくれニャー」
「はいはい当麻。桜炎双闇流、桜、五式“桜吹雪”俺に見つかったら最後、死ぬまでのカウントダウンだ！」

と、笑顔で宣言したと同時に、敵召喚獣を頭から切り裂いた。

「西村先生と呼ばんかバカ者が！」
「俺の事より、戦死者が逃げようとしてますよ？」
「ひっ！」
「ちぃっ、逃げられると思うな！！　戦死者は1人残らず補習だあああ！！！」

人間とは思えないスピードで駆け出し、そのままとらえ補習室へ。
その場に断末魔の名残にも似た戦慄を残して……

「流石は観察処分者。動きに精密さがあるから、相手の隙を作るにはこれ以上ないパートナーだ」
「え？　どういう事？」
「お前は召喚する機会が多いだろ？　それにフィードバックもあるから、通常より高精度な動きが出来る。俺は精密攻撃が得意だから、お前とは相性が良い」
「？？？　……よくわからないけど、でもこれならいけそうだね！
一真が居てくれて助かった」
「油断するな明久……ちっ、まずい！」

一真の視線の先には、２人の教師の姿。
化学の五十嵐教師と布施教師。

「全員分隊を維持して、敵を確実に撃破する事を考えろ！祐輝！お前が前線の指揮を取れ！」
「了解一真！」
「雑魚に時間をかけるな！」

戦線は拡大され、あちこちでは個別にぶつかり始める。
ＤクラスとＦクラスでは、単体での戦闘はあまりにも分が悪く、押され始めていた。

「さて……明久、化学は？」
「……聞かないで」
「まったく、死ぬなよ……」
「明久、一真よ！　援軍じゃ！！」

そこへ秀吉が美波をはじめとする、中堅部隊の援軍をひきつれ登場。

「ちぃっ、合流は絶対にさせるな！」

「言った筈だぜ？　俺の弾丸は当たる……それは」
一真の召喚獣が両手のガンブレードを構え、辺りを見回し始める。
そして、一真が軽く息を吸い……。
「動く多数の的だろうと、例外じゃないんだよ！」
左手に握られたガンブレードが、敵召喚獣の足を。
右手に握られたガンブレードから放たれた弾丸は、敵召喚獣の武器を破壊。
しかも全て命中し、大半が行動不能に陥った。
「よし、今のうちに下がれ！　……ちときついわ、これ」
「すっすごいね。本当に全部当たってたよ？」
「射撃に関しては、俺にミスはない……それより先遣は中堅と交代だ！　補充テスト受けるぞ！祐輝そっちも引かせろ！」
「了解！」
神竜一真　化学　３２９点
大和大輝　化学　４６１点
「まずい、無事な奴は神竜と大和に攻撃をしかけろ！　奴をここで止めるんだ！！」
「危ない、一真、祐輝！」
一真の召喚獣を狙った敵召喚獣を、明久の召喚獣が対抗。大輝は一瞬で敵を切り裂く
召喚獣のガンブレードが火を噴き、敵召喚獣の腕に当たって武器を落とした。

神竜一真　化学　３１２点。

大和大輝　化学　４２３点

「俺に勝てるわけ無いだろう？」

「さすが一真と祐輝！」

「いったん戻るぞ今のうちに補給だ！！！」

先遣部隊は補給に。

秀吉は、中堅部隊と合流してＤクラスと交戦。

Ｆクラスの教室にて。

「それで、明久とのコンビはどうだ？」

補給テストを受けている最中、代表の雄二からの言葉。

「予想以上にしっくりくる。あいつの観察処分者の肩書き、俺とのコンビなら最強に出来るな」

「成程。流石は一真だ、１＋－１京を、１０にも２０にもできるか」

「さり気に人をけなすんじゃない。しかも何で片方の桁が違うんだよ？」

「坂本ー！　吉井副隊長から伝令だ！」

全く……とぼやきつつ、テストを進める一真。

最も彼は、学力はＡクラスにふさわしい程度持っている。

「あのぉ……」

「ん？」

そこへ、この戦争の切り札であり、現在全科目のテストを受け直している最中の瑞希が声をかけた。

最後に受けたテストは振り分け試験の為、途中退席した彼女は現在全科目０点。（一真と大輝は次の日に受けている）なので現在、テストを受け直している最中だった。

「吉井君、大丈夫でした？」

「あいつなら大丈夫。俺とのコンビネーションで自信をつけた筈だから」

「本当ですか？　良かった……」

「ははっ。まああいつとはこの学園からの付き合いだけど、そう簡単にやられやしない……」

ピンポンパンポーン♪

『連絡いたします！　船越先生、船越先生。吉井明久君が、体育館裏で待っています。教師と生徒の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです！』

「……と信じたいな。可能性、恐ろしく低いかも知れんが」

「あっ、あははっ……」

「よし、これで戦線拡大阻止は大丈夫だろ。さて、そろそろ中堅部隊と合流するぞ！」

船越教諭　４５歳独身

婚期を逃し、ついには単位を盾に生徒に交際を迫る様になった女性教師。

吉井明久　本日2回目の生贄となる。
生存確率　０．０（数ケタ省略）０１％

「……つくづく思う事だが、あいつ明久の人生と命をなんだと思ってるんだ？　よりにもよって船越女史の生贄に捧げるだなんて、正直容赦ないを通り越してるだろ」
「あっ、あの……」
「……明久、もし生まれ変わりがあるとしたら」
「神竜君！　吉井君はまだ死んでませんよ！？」

数分後、身心ともに憔悴しきった姿で補給試験を受ける明久の姿があったという。

第5話　死神マフィアの力（初級）（後書き）

さあどんどん行くぞ！

第6話　あれれ？Dクラス制覇してた？（前書き）

問題
以下の問いに答えなさい
（1）４ｓｉｎＸ＋３ｃｏｓ３Ｘ＝２の方程式を満たし、かつ第一象限に存在するＸの値を１つ答えなさい。
（2）ｓｉｎ（Ａ＋Ｂ）と等しい式を示すのは次のどれか、？～？の中から選びなさい
？ｓｉｎＡ＋ｃｏｓＢ　？ｓｉｎＡ－ｃｏｓＢ　？ｓｉｎＡｃｏｓＢ　？ｓｉｎＡｃｏｓＢ＋ｃｏｓＡｓｉｎＢ

姫路瑞希の答え
（1）Ｘ＝π／６
（2）？

教師のコメント
そうですね。角度を『。』ではなく『π』で書いてありますし、完璧です

神竜一真の答え
（1）Ｘ＝３０。
（2）？たぶんね
教師のコメント
惜しいですが、ニアミスです。
象限における角度は『。』ではなく『π』で書いてください。
後選択問題に変なものをつけないでください。ちがいますし

土屋康太の答え

（1）X＝およそ3

教師のコメント
およそをつけてごまかしたい気持ちもわかりますが、これでは回答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え
（2）およそ？

教師のコメント
先生は今までたくさんの生徒を見てきましたが、選択問題でおよそを着ける生徒は君が初めてです。

破神当麻の答え
（2）1から4のどれか

教師のコメント
後で職員室に来るように

大神祐輝の答え
『あ～面白いことが思いつかない！！！』

教師のコメント
君までギャグに走らなくてもいいんじゃないでしょうか。

第６話　あれれ？Ｄクラス制覇してた？

第６話
あれれ？Ｄクラス制覇してた？

一真がテスト中に寝てしまい時間が飛ぶ。

Ｆクラス　姫路瑞希　現代国語　３３９点
ＶＳ
Ｄクラス　平賀源二　現代国語　１２９点

「え？　あ、あれ？」
「ご、ごめんなさい！」

ＦクラスＶＳＤクラス、姫路瑞希の召喚獣の一撃により、Ｄクラス代表戦死
この瞬間、試験召喚戦争はＦクラスの勝利となった。

「おいおい、一撃かよ。流石は姫路、我らが切り札だ。おぞましい・・・・」
「まったくだニャー」
「すごいねほんとに」
「いっいえ、そんな……」

先ほど明久と共に、平賀に攻撃を仕掛けようとした当麻と祐輝は、先ほどの光景を思い出して茶化す。
瑞希もほめられ、顔を赤らめた。

「ほら、明久も……あれ？」

「す、ストーップ！　僕が悪かった！！

先ほどまでいた筈の場所にはおらず、雄二に腕をひねりあげられている明久。
その足元には包丁が落ちており、祐輝たちはどうしてこうなったかを即座に理解した。

「あの放送は雄二の指示だから、明久がああなるのは仕方ないけど……」
「大神君たちは、吉井君には優しいですね？」
「あいつには何故か、通じるものがある様な気がしてな……皆の様にいじる気にはなれんだけだニャー」

解放されて、顔を青ざめた明久がよろよろと退却。
一真は呆れるも、駆け寄ってポンポンと肩をたたく。

「大丈夫かい？」
「うん、まだ大丈夫……生爪はがされるよりは、ね」
「そうか……さて、そろそろしめと行こうかにゃー？」

と言う当麻の言葉で、雄二をはじめとするＦクラスはＤクラス代表へと視線を向ける。
敗残軍としてへこたれる中、ゆっくりと力なく立ち上がる代表の平

賀源二。

「まさか姫路さんがFクラスだなんて、信じられない」

「彼女は試験の時、体調不良で途中退席したんだ。だからFなんだよ」

「そうだったのか……じゃあ神竜達さえ倒せば楽勝だと甘く見た時点で、俺達の負けは確定してたんだな」

さて、ここからは終戦後のルールが適用される。

試験召喚戦争において、勝者が下位クラスだった場合は敗者のクラスの設備を交換する事が出来る。

そして負けた勢力は、3ヶ月経たなければ次の戦争を起こせない。

勝てば英雄の様に扱われる代表も、負ければ戦犯として手酷い扱いを受ける立場……つまり。

「……ルールに従って、クラスは明け渡そう。ただ今日はもう遅いから、作業は明日からでいいか？」

彼はFクラスの最低設備で、クラスメイトに恨まれながら過ごさなければならないという事。

その表情からは、これから受けるだろう恨みと罵倒への不安しか見てとれなかった。

「いや、その必要はない」

……が、雄二のその一言が、それを一気に払い去った。

「え？　それは……どういう事なんだ？」

「Dクラスには、ある事をしてもらいたい。それを呑んでくれれば、

設備は見逃してやる」
「……話を聞かせてくれ」
雄二に伴なわれ、Dクラスへと歩を進めていく代表。
それに続いて、祐輝や当麻、明久は駆け出す。
「で、代表は何を御所望するつもりだ？」
「言っただろ？　Dクラスには、Aクラスを倒すためのステップとして必要な要素があると。それはあれだ」
窓際に歩み寄った雄二が、ある個所を指差した。
それは、Bクラス用の室外機。
「俺達の合図にしたがって、あれを動かなくしてほしい。タイミングは、俺が指示する」
「……わかった。上手くやれば、厳重注意だけで済みそうだ」
最低設備の下で、3ヶ月もの間恨みと罵倒をぶつけられる事を考えれば、まだいい方。
そう考え、平賀氏は呑む事に。
「でも、室外機なんて壊して、一体何の意味が？」
「さあな、代表には代表の考えがあるんだろ。ダメだったら思いきり罵倒してやればいいンじゃない」
「祐輝、黒くなってるそれもそうだね。今回の事で戦争のコツとかもわかった気もするし、次も頑張らないと」
それを見ていた明久と祐輝の会話が終わった処で、雄二が号令。
本日は解散となった。

「さて秀吉俺達も一真起こして帰るかにゃー？」
「そうじゃの。ならば代表に明久、祐輝お疲れ様なのじゃ」
「ばいニャらー」
「ああ、今日はゆっくり休んで明日のテストがんばってくれ」
「じゃあまた明日」

明久に雄二、祐輝と別れ、秀吉と一真（起こされた）、当麻は帰宅準備を整え帰宅。
ちなみに秀吉と一真と当麻の家は、お隣さん同士である。

「よもや、ワシらがDに勝つとはのう。一真と当麻と祐輝による物も大きいじゃろうが、流石じゃ」
「ははっ……俺達だけっていうの、確定なんだな？」
「いや、明久も立派に戦ったとは思うぞい。だがやはり、一真達と比べるとのう」

何事も、フィニッシュを決めた者が映える物である。
それに援護の面でも、彼による戦果は大きい。

「それにしても、疲れたな。なんか食べて帰るか？」
「そうじゃな。集中攻撃ともなると、疲れる物かの？」
「当たり前だ。集中状態を維持するって、すごい疲れるんだよ」
「俺は明久の次に制御がうまいからニャー」
「あら、一真に秀吉、当麻も。今帰り？」
「当麻～一緒に帰ろう」

秀吉に近い質の声にちょっと抜けたアニメ声、振り向くと、そこには……

「よう朱里、何だ秀吉、いつの間に着替えたんだ？」

「一真よ。ワシら姉弟が揃うなりそういうボケをするの、いい加減やめてもらえんか？」
「いや、これって双子だからこそのお約束だろ。そう思わないか、優子」
「アタシはこっち！」
「あはは、笑えるねぇ」
「まったくだにゃー」
「はあ」

秀吉の双子の姉にして、一真のもう一人の幼馴染、木下優子。そして当麻のお幼馴染、水野朱里
Aクラス所属の優等生であり、教師達から一真達と真逆の意味で覚えの良い模範生である。

「こんなところで何してるんだ？　もう殆どの生徒は帰ってる時間なのに」
「職員室で明日配る資料の整理を頼まれたのよ。それより、どうだったの？　試召戦争は」

新学期早々行われた試験召喚戦争は、当然話題にもなる。

「くっくっく、負けるわきゃねえだろ。ちと苦労したけど、俺達の勝ちだ」
「当然だニャ～」
「じゃあ明日からは、教室が近くなるのね」
「やった～！！」
「ああ。まあ今日は遅いから、明日から入れ替えだ」

目的はAクラスだと言う事は、伏せておいた。
優子と朱里がAクラスだと言う事もあり、ヘタに察知されればこれ

からに支障が出る。

そう考えての上で、先ほどのやり取りを聞かなかった事に。

「そうなると、明日からは大騒ぎね」

「まあ最低クラスがいきなり２つ上のＤを破ったって事は、大きな波紋になるだろうな。俺達からしたら当たり前だが」

「全く、余計な騒動の火種を作ってくれたものね。まあ学校からしてみれば、好都合なのでしょうけど」

「いずれ一真は国単位で戦争をしそうでならないニャ～」

元々学力低下の解決の為のシステムが、試験召喚システム。

テストの点数こそが全てであり、優等生こそが正義が文月学園の理である。

だから現状に甘え、ぬくぬくと過ごしていれば寝首を掻かれる。

そのいい教訓になるだろう。

「そういう意味では、俺達の決起も無意味じゃない訳だ」

「当然だニャ～俺達は最強だニャ～」

「調子に乗らないで！　ろくすっぽ努力もせず、不満だけを声高に掲げる様な人たちが調子に乗る事まで、肯定する気はないわ！」

「そうよ！馬鹿の集団の癖に！」

「それは最もだけど、立場と扱いは人を変えるって言うし、明日からは違うかもしれないだろ？、って言うか成績は俺のほうが上だし」

「俺は下だけどニャ～」

優子と朱里とて楽してＡクラスに所属する才女になった訳ではない事は、一真達とて重々に理解している。

少なくとも、Ｆクラスのバカ共とは違うという事は。

「アタシも、もっと頑張らないと、いつかあんたをぶちのめしてやるんだから！」
「「ならまずは、家の中を下着姿でうろつくのはやめ、その関節はそっちに……」」

文月学園に、断末魔が響き渡った。

そして、その帰り道

「いってー……復活に時間がかかるまでやることないだろ」
「そうだにゃ～死ぬかと思ったぜい」
「「うるさいわね、アタシの評判に傷がついたらどうする気よ！？」」
「「その前に問題児とはいえ、堂々と同級生に暴力をふるう時点でおかしくないか（にゃ）？」」

怒りのオーラを纏い、先ほどやられた個所を摩る一真と当麻を睨みつける優子と朱里。
実は彼女達、学園では模範的優等生である事で有名だが、プライベートではドがつく程ズボラだった。

「それに言われたくないなら俺が来た時位まともな格好してくれ。１００歩譲ってジャージ位は」
「同意見だニャ～」
「いや、それもどうかと思うのじゃが」

木下姉弟とは幼馴染と言う間柄で、しかも家が隣なので彼は遊びに行く事が多い。もちろん朱里の家も
だから、優子、朱里の下着姿を見た事は1度や2度ではない。

「まあ見慣れた上に寸胴だから、大して面白くも何ともないけど」
「その意見も同意するニャ～」
「「それは腕と足がいらないと解釈しても良いのね？」」
「「申し訳ございません」」
「ん？　一真、当麻よ、あれは明久ではないか？」

秀吉の視線の先には、とぼとぼと歩いている明久の姿。
流石に一真と当麻と秀吉以外に暴力的な姿を見られるのは勘弁なのか、優子と朱里もそれを聞いて殺気を納めた。

「あっきひさ～、どうした？」
「辛気臭い顔するんじゃないニャ～」
「ん？　ああ、一真に当麻に……あれ、秀吉？　どうして女子の制服着てるの？後そこの人は」
「ワシはこっちじゃ。それはワシの姉上じゃ、そしてこっちが水野朱里じゃ」
「姉上って、じゃあもしかして木下優子さん？　へえっ、確かに秀吉そっくりの美少女だね。水野さんも」
「ワシを基準にするでない」
「「っぷっくくくく」」
「「（ギロ）」」
「「（シュキーーーーン）」」

秀吉とは仲が良くても、優子とは縁の薄い明久。ましてや朱里はまったく面識が無かった
基本遊ぶのは明久の家である事が多い為、彼女達とは面識がなかった
「彼が“観察処分者”の吉井明久君？　へえっ、どんな極悪人かと

思ったら、意外とまともそうね」
「そうね」
「極悪人って……ねえ、僕の評判って一体どうなってるの？」
学園１の危険人物と名高い一真、その参謀当麻の相棒なのだから、そういうのも無理もない。
「それより、どうしたんだ明久？　偉く落ち込んでるようだけど？」
「あっ、うん。ちょっとショックなことがあってね」
「ショック？　……何があった？できることならすんぞ？」
一真がかけより、明久と向き合う。
それを優子が、顔を赤くしてそれを凝視し始める。
「……」
「フムッ、そういえば、姉上の部屋に一真と明久のあっ、姉上っ、違っ！　その関節は、そっちに曲がらな……」
「そうや朱里の家にも…まっまってくら！！」
訂正、優子と朱里が秀吉に関節技をかけつつ、その光景を凝視し始める。
「姫路さんに、好きな人が居るって話を聞いてね」
「ああっ、その事か」
「あいたたた……なんじゃ、随分と面白そうな話ではないか？」
「「姫路さんって、あの姫路さん？」」
恋の話ともあって、木下姉妹（笑）と朱里もそれに駆け寄った。
秀吉と当麻は先ほどやられた関節技の痛みで、よろよろと遅れての到着。

「それが誰かっていうのが、わかっちゃったから」
「おっ、そうなんだ。んで、どうなんだ？」

一真と当麻はにやにやとし始め、優子と秀吉と朱里はその様子を見て一真と当麻の考えに感づいた。

（姫路さんって、まさか吉井君の事を？）
（うむっ、明久に話しかけられ動揺しておったり、お弁当を作ろうかと提案したりとかの）
（そうなんだ。彼も“観察処分者”なんて言われてる割には、意外とやるわね）

勘づいてからは、２人してこそこそと内緒話。
美人姉妹の内緒話と言うのも絵になる光景だが、そこは割愛。

「でも意外だったな……まさか姫路さんが、雄二の事が好きだなんて」
「ああ、そりゃ確かに……「「はい？」」」お前馬鹿か？」

一真と秀吉、優子が明久の口から出た答えに、素っ頓狂な声を揃えてあげた。当麻と朱里は物も言えない

「ちょっと待て。今なんつった？」
「だから、雄二だよ。驚くのも無理ないかもしれないけど」
「一体なぜ、そのような答えに至ったのじゃ？」
「さあ？　でも、姫路さんも雄二と話してる時一生懸命だったし、あそこまでだったらクラスメイトとして、応援してあげないとね」

と、明久は自分の家の方向へと走り去ってしまった。

その場に残された人間は……

「あれって多分、坂本君に吉井君の事を相談してた場面に出くわした……そう考えても良いのよね？」

「うむっ、確実にの……姫路も気の毒にのう。自身の行動が、これ以上ない程裏目に出るなどとは」

「明日は違う意味でも、大きな波紋が起きそうだな」

そして帰りに不良に絡まれたが、一真と当麻による公開私刑が行われた。

第6話　あれれ？Dクラス制覇してた？（後書き）

眠い。でもがんばる。

第7話　破滅を呼ぶ死の弁当（前書き）

問題
以下の文章の（　）に正しい言葉を入れなさい
『光は波であって、（　）である

姫路瑞希の答え
『粒子』

教師のコメント
よく出来ました

土屋康太の答え
『寄せては返すの』

教師のコメント
君の回答には、先生はいつも度肝を抜かれます

吉井明久の答え
『勇者の武器』

教師のコメント
先生もＲＰＧは好きです。

神竜一真、破神当麻の答え

『キ〇グダムハーツの主題歌』

教師のコメント
君達の髪形の理由が分かった気がします。

大神祐輝の答え
『某おっさんの技である』

教師のコメント
２億冊ですからね。

第7話　破滅を呼ぶ死の弁当

第7話

破滅を呼ぶ死の弁当

「あれ？　どうして？」
「ん？　どうしたの？」

一時限も終わり、折角だからと元Dクラスの教室へと出向いた優子と朱里。
そこにいたのはFクラスの筈なのだが、元の通りのDクラスの面々。
中をのぞいてみたら、通常通り過ごしている光景があるだけで、引越しの準備には到底見えない。

そして何より、目の前にいるDクラス代表もいつも通りである事。
誰も彼に対し、恨みや侮蔑の視線を向けてはいない。

「Dクラスは負けた筈なのに、なんで明け渡す準備をしてないの？」
「ああっ、設備の入れ替えは免除してもらったんだ。ある取引をしてね」
「ある取引？　……そう。それなら、邪魔してごめん」

その言葉に引っかかりを感じて、優子と朱里は一路Fクラスへ。
その去って行った姿をみて、話し相手であった平賀源二は一言。

「もしかして、神竜と破神と付き合ってるって言う噂、本当なのかな？」
「どうしたの、代表？」

「いや、何でもない。それより、テストの勉強しないと」
事なきを得たとはいえ、Ｆクラスに負けた敗残勢力であることには変わりはない。
なので来るべき次に備え、勉学に励むようになったという。

そして、旧校舎にて。

「なっ……何ここ？　Ｆクラスって、こんなに酷いの？」
教室に出向くなり、優子はその光景に顔を顰めた。
設備に差がある事や、それによりＦクラスは最低である事は知っていた……が。

開け放たれている扉から見える光景は、Ａクラスである優子には衝撃的なものだった。
確かにこれでは、今すぐ変えたくなっても無理もないかもしれない。

「ますます怪しい……何で、この設備を取り換えなかったの？」
キノコの生えた腐食畳、脚の折れた卓袱台、ぼろぼろの座布団。
中には卓袱台を木工ボンドで修理していれば、窓をビニールとセロテープで修繕している生徒の姿も。

「ん？　姉上、朱里何故ここに？」
その中の２人、弟である秀吉が気付いて駆け寄った
それを聞いて、幼馴染である一真と当麻も同様に。

「何だよ優子、朱里Ａクラスの一員様がこんな汚い所に何の用だ？」
「まさかの、皮肉かニャー？」
「「何の用だじゃないわよ。一体どういう事？　折角だからって顔出してみたら、設備を入れ替えていないなんて」」
「代表の意向だ。詳しくは俺も知らん」

その言葉に、優子と朱里は引っかかりを感じた。
……が、所詮はよそのクラスである自分に、ばらす訳がないとあきらめる事に。

「うあ～……」
「あの、大丈夫ですか吉井君？」
「本と災難だったねー明久」
「うっ、うん……貞操は守る事が出来て、良かった」

ふと、卓袱台に突っ伏して唸り声をあげている男子と、それに心配そうに見守る女子と男子の姿が目に入った。

「ん？　あれは、吉井君じゃない。どうしたの？　テスト疲れってだけじゃなさそうだけど」
「昨日の放送についてだ」
「ああっ、船越先生に男女の会合の呼び出しをしたって話よね？」

全校放送であった為、優子と朱里も例の放送は聞き及んでいた。
偉く酔狂なマネをと思ったが、状況的に考えればそういう作戦なのだろうと、即座に考えつく。

「作戦とはいえ、明久も災難じゃったのう。偉く目をつけられておった様じゃし」
「ああ。祐輝の近所のお兄さん（３９歳独身）を紹介して、事なき

を得たらしいけど」
「Fクラスにも色々あるのね……それより」
優子は少し視線をずらし、明久の席の隣の席に座る瑞希と祐輝にピントを合わせた。
幸せオーラに身を包みながら、明久を微笑ましく見守る姿とそれに近づけない彼を見て一言。

「確かに、見ればわかるわね？　同じ女性として、羨ましい程に、大神君なんか話そうとしてるのに近づけてない」
「そうじゃのう。何故あれで坂本に好意があると、断定できるんじゃろうか？」
「「わからん。けど明久の場合、言える事はただ1つ」」

コホンっと咳ばらいをし、一言。

「「鈍感な人間と言うのは、総じて自信を持っていない人間の事だと思う（にゃ）」」
「成程のう。可能性を考えつく事は出来ても、自信の無さ故に否定してしまうと言った処じゃろうか？　確かにそれでは、上手くいく訳がないわい」
「見た目はそれなりにまともだから、傍から見ればお似合いなのにもったいない」
「そうね」
はぁっ、と5人そろってため息をついた。

Fクラスのテスト漬けの午前が終わり、昼休み。

「よし、昼飯でも食いに行くぞ！　今日はラーメンとかつ丼とカレ

ーと炒飯にすっかな？」
「あっ、じゃあウチも一緒していい？」
「さて何に突っ込もうか」
「突っ込んだら負けニャー」

雄二の言葉に、美波が駆け寄った。
その近くで話していた明久と一真、秀吉と祐輝、当麻も同意。

「それじゃ僕は、贅沢にソルトウォーターでも」
「……奢ってやるから、塩水を贅沢と言うのはやめろ。そんなじゃそのうち倒れるぞ？」
「今日は俺もこないだの試合のギャラが入ったからおごってやるニャー」
「ぼくもいってくれたらおごるよ？」
「だって、新作ゲームや漫画は毎月出るし、発売日に手に入れるのが当たり前じゃないか」
「けどそんな生活がバレたら、確実に1人暮らしをやめさせられるぞ？」
「うっ……でっでも一真と当麻は代表の収入があるし祐輝はバイトがあるからから、そんな生活ができるんだよ。」
「その代わり親がいないため、仕送りなし、わかったか？明久」
「はい・・・・・」

普通に考えて、明久の生活は一定水準を遥かに下回る。
仕送りをしているにもかかわらずこれでは、意味がないと思われても文句は言えない。

「お前ら、本当に夫婦みたいだな」
「そうよねー。神竜って世話焼きなのは知ってるけど、ダメ亭主と世話焼き女房にしか見えないわ」

「確かにのう。世話焼き気質、ここに極まれりじゃ」
「「確かに」」
「……同意」

6人6様の反応を見せる中で、1人の少女がその空気を崩した。

「あっ、あの、皆さん？」
「ん？　どうした姫路……って、あれ？　そのお重箱は？」
「あの、昨日の約束の」

と、恐る恐る手に持った重箱を差し出す瑞希。
それを見て、全員歓喜の声を上げた。

「へぇっ、本当に作ってきたのか。しかも重箱にだなんて、大変だったじゃないか？」
「いえ、そんな事は……だから、御迷惑でなければ」
「迷惑なもんか。ねっ、雄二！」
「ああっ、そうだな。ありがたい」
「そうですか？　よかった～」

ほにゃ～ッとした笑顔で、喜ぶ瑞希。

「むーっ、瑞希って意外と積極的なのね」

その中で、明久を睨みつける美波。

「折角の姫路の手料理、こんな汚い所で食う物じゃないな」
「そうじゃの。屋上で食べると言うのはどうじゃ？」
「そうだな。今日は天気も良いし、ちょうど良い。それじゃ先行って場所を確保してくれ。飲み物買ってくる」

「あっ、それならウチも行く。1人じゃ持ち切れないでしょ？」
雄二と美波は、一路1回の売店へ。
その残りは、明久が瑞希から弁当を受け取って、屋上へと歩を進めた。

「結構重いね。こんな量、作るの大変だったでしょ？」
「その……がんばりましたから。それに、喜んでいただけるならこれ位は……」
「なんか、姫路さんの旦那さんになる人が羨ましい」
「えっ！？　でっでしたら、その……」

その会話を、傍から聞いてる一真達は。

「……なあ、秀吉」
「何じゃ？　あれで本当に気付いてないのかと言う疑問なら、ワシもちょうど同じ事を考えておったぞ」
「そうか……空気的には見ててほのぼのするけど、実際には姫路が気の毒なんだにゃー」
「うーん、明久ちょっとこれはないね」

傍から見れば、ほのぼのとした恋人らしい雰囲気の光景。
事情を知る者として、どうしても姫路が気の毒に見えてしまう一真達だった。

「どうにかしてやりたいのう」
「明久自体、既に姫路の相手は雄二だと確定……おーいムッツリーニ、階段の下で低姿勢になるな」
「……！（ブンブン）」

その後屋上に到着し、シートを広げて陣取り完了。

「風と日差しが心地いいね。それにお弁当も楽しみだな」
「ああ。こんな好条件で女子の手料理を食べるなんて、俺達健全なる男子高校生にとって最高の贅沢だ」
「うむっ、男として心から同意じゃ」
「……（こくこく）」
「当麻さんも同意で～す」
「僕もだね」
『妻帯者はうらやましがんな！！！！奥さんに作ってもらえ！！』
「あの……あんまり、自信がないのですが」

期待が渦巻く中、瑞希は中央に置かれた重箱のふたを持ち上げる。
そして、瑞希作のお弁当の全容が、今明らかに！

「「「「「おおっ！」」」」」

今、６人の男の声が一つとなった。

「すごいなあ。流石は姫路さん、料理までできるなんて」
「うむっ、良い嫁さんになりそうじゃ」
「そっそんな……」
「じゃあ早速って、あっ！」

その破滅の足音は、誰一人気付かなかった。

「ずるいぞ、ムッツリーニ！」

しかし、それは着々と近づいていて……

「……（パクッ）」

今、それは明らかとなる。

バタンッ！！！　ガタガタガタガタガタガタ……

彼らの身に降りかかる、大いなる災厄の姿に。

「……ってちょっと待て、何でミステリー風味なんだよ！？」

「何がですか？」

「いや、こっちの話。そんなことより、どうしたんだムッツリーニ！？」

楽しくほのぼのとした筈の昼休み。

しかし今、戦慄が走ろうとしていた。

「つっ土屋君！？」

姫路瑞希作のお弁当の一品、海老フライ。

それを口にした途端、豪快に倒れ小刻みに震え始めた男、ムッツリーニ。

「どっ、どうしたのムッツリーニ！？」

「何があったのじゃ！？」

「まずいにゃー」

「わからん。海老フライを食べ……まさか」

一真は海老フライをとり、匂いを嗅ぎ始めた。

即座に顔を青ざめて、めまいに似た感覚に襲われる。

「……とりあえず、何を入れたかを聞かせてくれないか？」
「何と言われましても、普通に作りましたよ？　隠し味に“硫酸”を入れた位で」
「普通に……ん？　硫酸？」
「ひゃ～こわ」

不吉な単語を聞きとった一真と当麻は、その海老フライを畏怖の視線で見つめる。

「どうやって手に入れたかが気になるところだけど、どうしてそんな物を？」
「ちょっと、酸味が欲しいと思いまして」
「……なあ姫路、俺の知識に間違いがあるかもしれないから、硫酸の特性を教えてくれないか？」

少々罪悪感に晒されつつ、一真は内容説明に。
秀吉と明久と当麻は、その姿をまるで勇者の様に尊敬の意を以て見詰め始める。

「おう、待たせたな。へー、こりゃ美味そうじゃないか。どれどれ？」

手に飲み物の缶を抱えた雄二が、瑞希の弁当に手を伸ばす。
そのうちの卵焼きをつまんで、一口。

「あっ、雄二！？」
「まずいにゃー！！」
「やっやばい！！！」

食べた途端、缶をぶちまけて倒れた。

それも、ムッツリーニと同じく小刻みに震えるのも同じに。

「……で、卵焼きは何を？」

「えっと、クロロ酢酸を……」

「……パンとお茶を買ってくる。明久、当麻、祐輝、手伝ってくれないか？」

「うん、わかった」

とんだランチタイムとなってしまった。

数分後。

「……まさか、姫路にこんな欠点があったとは」

「……意外」

被害者2名は、殺菌作用のあるお茶を大量に飲みながらの会話。顔色も悪く、小刻みに震え続けたまま。

「……すみません」

「気にしなくて良いよ、姫路さん。誰にだって失敗はある物だし」

「そうだぞ姫路。失敗を言ったら明久なんか、土下座どころか死んでも詫びきれない量あるんだ」

「失礼な！当麻も声を殺して笑うな！！」

瑞希への明久のフォローを、雄二が茶化す。

それを見て、瑞希もようやく落ち着いたのか笑みを浮かべた。

「でもうまそうなのは事実だし、筋は良いとは思うよ？　だから明久の家で練習すればいいじゃないか。いっそ花嫁修業の一環って感

じで」
「はっ、花嫁修業……ですか！？」
「え！？　ちょっ、一真！　何を勝手に……」
「女の子が世話しに来てくれるってのに、何の不満があるんだよ？
そもそもお前の生活破綻ぶりを考えれば、その方がずっといいだろうが」
「残念だけど僕もそう思うよ明久」

明久とて、健全な男子高校生である。
そういう事に理想を抱くなと言われても、無理な相談である。

「でっでも、そこまで酷くは……」
「あの生活のどこをどうしたらそう言える？　ガスや水道は止まってるわ食える物は何にもないわ、生きてる事自体が不思議なくらいだ」
「はははは」
「失礼だなあ。何にもないってことはないよ」
「砂糖に塩、サラダ油だろ。今でも思い出すだけで吐きそうだ」

その他全員も同意したように、多少顔をしかめて頷いた。
少なくとも、現代人の食生活じゃない。

「確かに、世話する奴が居た方が良いな」
「そうじゃな。とても“現代の人間がやる”生活とは思えん」
「……同感」
「「明久そのうち死ぬよ？」」

雄二、秀吉、ムッツリーニ、当麻、大輝も、その方が良いと肯定。
が、雄二とムッツリーニの目は笑っていなかった。

「ちょっ、そんな勝手に！」
「それにだな」
「え？」

一真がニヤリと笑みを浮かべ、皆に聞こえないように声をひそめ始める。
それを見て、秀吉も混ざり始めた。

（チャンスでもあるだろ？）
（チャンスって、姫路さんは……）
（それはあくまで明久の勘じゃろ？　ここで頑張れば、あるいはの可能性も含まれるじゃろうて）
（一真、秀吉……けど、姫路さんの都合もあるし、それに男の１人暮らしの部屋にだね？）

「あの……吉井君さえ迷惑でなければ、お願いしてもよろしいですか？」

あっさりと了承された事に、明久は驚き一真達はうんうんと頷きあった。

（よし、チャンスだ明久。良い雰囲気を作って、押し倒せ！）
（うっ、うん。わか……らないよ！　最後の余計だよ！）
（大丈夫だ、お前ならできる。お前なら姫路を押し倒す事が出来る、自分を信じろ！）
（いや、青春ドラマみたいなノリで言われても困るよ！）

動揺はしてはいても、明久の脳内ではシミュレートされていた。
しかし、その空気を破る者が。

「ちょっ、ちょっと、何言ってるのよ瑞希！　吉井は1人暮らしだって言うのに、行ったら何されるかわかった物じゃないわよ！？」
「考えてみれば、ケダモノの檻にウサギを放り込むような物だな」
「……（こくこく）」

美波の剣幕を見て、にやりと笑みを浮かべる一真。
ピンっ！　と、閃いた素振りを見せ、美波にある宣告を面白半分で告げた。

「じゃあ島田も一緒に行けばいいだろ？　何かやろうとしたら、いつも通り関節外せばいい訳だし」
「え！？　なっ、何でウチが！？」
「その前に僕、了承してないんだけど……そこの二人！腹を抱えて笑うな！！」

パンを食べつつ、まったりとした時間だけが過ぎて行った。

パンが無くなり、ある程度時間もたったころ。

「それで試召戦争だけど、次はBクラスなんだったな？」
「ああ。Bクラスにも、Dクラスと同様に俺達がAクラスに勝つための要素がある。俺たちじゃ真正面からぶつかった処で、勝ち目はないからな」

Aクラスは当然、この学園選りすぐりのエリート達。
試召戦争は代表を倒す事が勝利であるが、Aクラス代表はそれすなわち学年首席。
Fクラスの戦力では、囲った処で返り討ちに遭う事は容易に想像がつく。

「それで、どうする気だ？」
「Ｂクラスとこの戦争のシステムを使って、Ａクラスとの戦争は一騎打ちにする」
「システム？」
「ああ。下位クラスが負けたらどうなるか知ってるか明久？　ムッツリーニ、ペンチ用意しておけ」
「え！？　えーっと……」

いきなり話を振られた明久は、どぎまぎし始める。
それを見て瑞希が、こっそりと耳打ち。

（吉井君、負けたらランクを１つ落とされるんですよ）
「あっ、そうそう。で、下位クラスが勝ったら設備を入れ替えが出来るんだったね？」
「そうだ。そのシステムを利用して、Ｂクラスに交渉する」
「成程な。設備交換免除を条件に、ＢクラスにＡクラスへ宣戦布告させる。そのあとで俺達は連戦を匂わせる通告をし、一騎打ちの条件を呑ませる……か？」

雄二が頷く。
明久も今の話を聞いて、納得するように頷くが……

「しかし、上手く行くのか？　向こうとしては試召戦争の方が確実なのは事実だ」
「また俺が調べようかニャ？」
「嫌それじゃあ駄目だろ、僕は何とかして相手を説得するしかないと思うんだけど」
「そうじゃな。じゃが実力者の一真、祐輝、当麻は当然として、姫路の事も既に知れ渡っておるじゃろうし」

「それに関しては考えがある。それよりまずは、Bクラス戦だ」
いずれにせよ、Bクラスを倒さなければ意味がない以上はと、話は締めに。
雄二は明久と一真を交互に見て、一言。
「明久、今日のテストが終わったら、Bクラスに宣戦布告して来い」
「断る！　雄二が行けばいいだろ」
「やれやれ、それじゃジャンケンで……」
「ちょっと待て」
「俺達がいくニャー」
2人の間に入ったのは、その手にはアサルトライフルが握られている一真と当麻。
その姿に、若干2人どころか、瑞希をはじめとする他のメンバーも恐怖を感じた。
「俺達が行くよ。Bクラスの代表、あの根本って聞いたことあるから」
「と言うか俺が調べたニャー」
「根本だと！？」
根本恭二
とにかく評判が悪い男で、目的のために手段を選ばない事で有名。
“カンニング常習犯”“ケンカで刃物はデフォ装備”“球技大会で一服盛った”とまで言われる程。
「そうだとしたら、妙な事をされないように牽制した方が良い」
「そうか。確かに明久じゃ、インパクトに欠けるな……」

「だったら雄二が行けばいいだろ。でも、それじゃ一真達っていうのも……」
「じゃあ明久も来るか？　心配しなくても、コレクションとこれ位なら貸してやるよ」
と言って、一真は懐から自動拳銃とスタンガン（２０万ボルト）、ナイフを取り出し、明久に手渡した。
「……また、僕は危険人物として知れ渡るのかな？　３６５度どう見ても美少年なのに」
「バカとしてなら知れ渡ってるぞ？　ちなみに５度多い」
「うむっ。実質５度じゃな」
「２人とも嫌いだ！」

そして放課後。

「それで、明日の午後からかの？」
「ああ。根本の姿もきっちり確認したし、色々と脅したからまず問題ない……と信じたいな」
「うむっ。卑怯な手を使われて負けると言うのは、納得できんからのう」
「その辺は参謀の俺の腕の見せ所ニャー」
家がとなりなので、自然と一緒になる一真と秀吉と当麻。
その帰り、明日からの試召戦争と……敵側の代表である根本の卑怯な手段への警戒について、話し合っていた。
「まず狙われるとしたら、一真と姫路と当麻と祐輝じゃな」
「俺らはともかく、姫路が心配だな……ん？」

ふと、一真が目を向けた先には……

「……あれは」
「ん？　どうし……」
「しっ！」

秀吉をひっつかんで、物陰に隠れる一真と当麻。
口をふさぎつつ、もう片方の手で目標に指差した。

「改めて、警戒した方がよさそうだな」
「うむっ。事によっては、の」

と、こっそりとその場を後にしようとした所で……

「一真、秀吉、当麻！　あんた達何やってるの！？」
「え？　優子？」
「ん、ああ朱里かニャー」
「おおっ、姉上、朱里。どうしてここに？」
「そんな事はどうでもいいわよ！　何であんた達、こんな所で抱き合ってるの！？」

ふと、一真と秀吉は自分達の現状を省みる。
“ある物”から隠れる為に、秀吉を抱き寄せる形で……。

「言ったわよね一真？　秀吉と妙な事をしないでって」
「妙な事って、ワシも一真も男じゃぞ？」
「その所為でアタシが一真と付き合ってるって、迷惑な噂が流れてるのよ！」
「迷惑って、それが幼馴染に言う事か？　それに俺だってもう、お

前みたいな寸胴に……あっ、ごめんなさい。訂正するからその関節をそれ以上……」

「ははは、」

断末魔が響き渡った。

第7話　破滅を呼ぶ死の弁当（後書き）

よしとめよう。感想を入れてくださいっと作者は作者は土下座します

第８話　死神マフィアの力（中級）（前書き）

問題
以下の問いに答えなさい
『ｇｏｏｄおよびｂａｄの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希の答え
『ｇｏｏｄ　？　ｂｅｔｔｅｒ　？　ｂｅｓｔ
ｂａｄ　？　ｗｏｒｓｅ　？　ｗｏｒｓｔ』

神竜一真、大神祐輝の答え
『ｇｏｏｄ　？　ｂｅｔｔｅｒ　？　ｂｅｓｔ
ｂａｄ　？　ｗｏｒｓｅ　？　ｗｏｒｓｔ』

教師のコメント
その通りです。まさか神竜君が他のことを何も書かずに正解するとは

吉井明久、破神当麻の答え
『ｇｏｏｄ　？　ｇｏｏｄｅｒ　？　ｇｏｏｄｅｓｔ』

教師のコメント
まともな間違え方で先生驚いています。Ｇｏｏｄやｂａｄの比較級と最上級は語尾に－ｅｒや－ｅｓｔを付けるだけではダメです。覚えておきましょう

土屋康太の答え

『ｂａｄ　？　ｂｕｔｔｅｒ　？　ｂｕｓｔ』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

第8話　死神マフィアの力（中級）

第8話

死神マフィアの力（中級）

第二回試験召喚戦争
Bクラス　VS　Fクラス

「いたぞ、Bクラスだ！！」
「高橋先生を連れて居るぞ！！」

昼休みのチャイムが鳴り終わると同時に、戦いは始まった。
前線指揮は前回と同じく神竜一真、先陣を切るは吉井明久と木下秀吉、破神当麻、大神祐輝。

「ねえ一真、今回は前に出ないの？」
「いや、今回は俺が前に出るのはまずい」
「一真は、今回は雄二の策で後ろだよ。Bクラスは文系だから一真が前に出れないんだ。」

「それに一真は前線だとやりすぎるからのう。銃で人を殴ったり。」
「うるさいぞ秀吉！」
「ほんとのことだから仕方ないニャー」
Ｂクラスはまず、１０人前後に対しＦクラスはほぼ総力。
今回は廊下を制することが先決ともあり、勢いが大事だからだ……
が。

『Ｂクラス　野中長男　総合１９４３点』
ＶＳ
『Ｆクラス　近藤吉宗　総合７６４点』

『Ｂクラス　金田一祐子　数学１５９点』
ＶＳ
『Ｆクラス　武藤啓太　数学６９点』

『Ｂクラス　里井真由子　物理１５２点』
ＶＳ
『Ｆクラス　君島博　物理７７点』

Ｄクラスとは格が違い、ほぼあっさりと大半が押し切られてしまった。

「援護する、やられそうな奴は下がれ！！」

やられそうになった召喚獣を、一真の援護射撃でフォローし撤退を指示・

『Ｂクラス　工藤信二　物理１６５点』
ＶＳ

『Ｆクラス　神竜一真　物理７９８点』

「え！？」

「今回ちと調子が悪かったからこの程度だが、物理なら得意中の得意なんだよ」

「うっ、ウソだろ！？　調子悪くてこれかよ！？」

元々、一真のような召喚獣は、出鱈目だ。

教科ごとに武器が違うと言うだけでおかしいのだがそれよりもその点数による能力に頼りがちなになるところも、完全に無視してフィーリングによる能力を使わない戦いが多い。

そのため、一真の召喚獣は、どんな武器でも最高の戦いをする。ちなみに今回は太刀だ。それなら一真の最強の力が存分に発揮される。

「桜炎双闇流、炎、三式不知火！」

一真の召喚獣が、敵に真正面から突っ込んで、重い一撃を浴びせる

「よし、１人撃破！」

「Ｂクラス、真田由香。神竜一真に数学勝負！」

「させないニャー破神当麻が代わりに受ける！」

「サンキュー当麻！」

『Ｂクラス　真田由香　数学１６６点』

ＶＳ

『Ｆクラス　破神当麻　数学１２１点』

「調子悪くない？当麻」

「何とかやれない事もないかにゃー」
点数を見て、敵Ｂクラスの女子は笑みを浮かべた
「でも点数は勝ってる！」
「甘い！」
敵召喚獣が当麻めがけて飛びかかるのを。楽勝と言わんばかりに武器を振り下ろすのをかわして、足払い。
「え！？」
「隙だらけだぜい！」
そこをすかさず、敵召喚獣の腕をナイフで切り落とした。
それにより落とされた召喚獣の武器は、当麻が吹き飛ばした
「よし、あいつを狙え！」
「よし来た！」
「俺もだ！」
そのまま物流に呑まれ、Ｂクラスの女子は哀れ補習の餌食となった。
「やったな相棒」
「やったニャー！」
「よし、神竜たちに続け！！」
そのまま一真と当麻はハイタッチ。
それに勢いを付けて、Ｆクラスは奮起！
「古典で神竜一真に勝負を仕掛ける！」

「テーツージーン補習室一人ついか！」

『Ｂクラス　鈴木次郎　古典２１０点』
ＶＳ
『Ｆクラス　神竜一真　古典７４０点』

「はっおら、蜂の巣だ！！」

そういってガトリング砲をぶっぱなす一真。敵は蜂の巣になり、鉄人のそうくつへ連れて行かれた。
後ろから一真が狙われる。

「Ｂクラス根岸太一古典で神竜一真に勝負を…「やらせない！大神祐輝、いきますサモン！」っち！」

『Ｂクラス根岸太一　古典２８９点』
『Ｆクラス大和大輝　古典５１２点』

Ｂクラスの召喚獣は、一瞬で祐輝のビームライフルで打ち抜かれた。

「サーンキュウ祐輝！」
「いや、お礼は後だ！はやくこの状況を打解しないと」

「お、遅れ、まし、た……ごめ、んな、さい……」
「おいおい、大丈夫か？」
「はい……平気、です……」

そこへ、息絶え絶えだがＦクラスの勝利の女神登場！

「来たぞ、姫路瑞希だ！！」

「長谷川先生、Ｂクラス岩下律子です！　Ｆクラス姫路瑞希さんに、数学勝負を申し込みます！」
「律子、私も手伝う！」
瑞希が現れた途端、Ｂクラス陣営は表情を引き締める。
まず、１０人程度の戦力しかいないのに、２人がかりで勝負。

『Ｆクラス　姫路瑞希　数学４１２点』
ＶＳ
『Ｂクラス　岩下律子＆菊入真由美　数学１８９点＆１５１点』

「あっ、腕輪！」
「腕輪？　……それって確か、何点かオーバーしたら、特殊能力が付加されるって言う？」
「まあ、姫路ならおかしくはないか」
瑞樹の召喚獣が、腕輪を付けた左腕を向けると、腕輪から光線が放たれる。
そのうち1体を炎でつつみ、もう1体も大剣でなぎ払い、戦闘不能へと追いやった。
Ｂクラス前線戦力現在６名。
「姫路も着たことだしあれやるか。オイお前ら！アーユーレディ？」
『ィエース！』
「「「「よし行くぞ！ヒューウィーゴー！」」」」
『レッツパーリィィィ！！！』
相変わらずこいつらはのりがいい

「よし、このままBクラス教室まで押し切るんだ！」
「みっ、皆さん、頑張ってください！」
「「「「おおーーーっ！！！」」」」
2大主力の激励（効果割合　瑞希9：一真達1）で、士気は大幅アップ。
「さて……姫路、このまま前線の指揮頼む。秀吉、明久、当麻、祐輝！一旦戻るぞ！」
「え？　はっはい、わかりました」
前線は一旦瑞樹に任せ、一真達は一旦後退。
秀吉達は事情を知っていた故に納得したが、明久はまだ一真も自分も補給が必要な程ではない為、疑問顔。
「どうしたのさ、一真？」
「そろそろ根本が動くころだと思ってな」
「そうだね」
「めんどいニャー。俺と一真は特に」
「雄二に何かあるとは思えんが、そろそろなんらかの手段を講じる頃じゃ」
「急ごう」
「そうだニャー」
5人は駆け足で、Fクラスへ。
教室の扉を開けるや否や、そこに広がっていた光景は……
「……やってくれやがったな」
穴だらけの卓袱台に、へし折られたシャーペンと消しゴムと言う光

景。

「酷いね。これじゃ補給がままならない」
「うむ。地味じゃが、点数に影響の出る嫌がらせじゃな」
「あまり気にするな。修復に時間はかかるが、作戦に大きな支障はない」

そこへ、代表である雄二が割り込んできた。

「雄二、これは一体どういう事だ？」
「協定を結びたいという申し出があってな。調印のために、教室を空にしていた」
「協定じゃと？」
「ああ。４時までに決着がつかなかったら、戦況をそのままにして続きは明日午前９時に持ち越し。その間、試召戦争にかかわる一切の行為を禁止するってな」
「それ、承諾したの？」
「そうだ」

時間的には、こちらの作戦通りに事が進み、そのころには教室へ押し込める戦況から始められるはず。
Ｆクラスとしては、好条件ではある。

「確かに、それなら姫路が万全の状態で始められるから、俺達としては都合が良い……が、どうにも解せないな」
「ああ。確かにあの根本がそんな協定を結ぶなんて引っかかるが、今回もクラス全体と言うより姫路の個人戦力がカギとなる以上、乗った方が勝率が高くなる事は事実だ……一応、用心してくれないか？」
「ああ。明久、秀吉、お前らは前線に戻れ。俺は雄二と一緒に、シ

ャープや消しゴムの手配をやるから、当麻、祐輝、あいつのこと調べといてくれ」

明久と秀吉が頷くと同時に、教室を飛び出して行った。当麻と祐輝はその場でパソコンを取り出し、ハッキングを開始する。
2人を見送ると、近衛隊および雄二と共に教室整理を始める。

「それで、代表閣下はどういう思惑だとお考えで？」
「補給手段を断つ為だけに、こんな向こうに不利な条件を出すとは思えん……何かがあるな」
「ああ……ムッツリーニと合流して情報収集に」
「それはダメだ。姫路に次ぐ主戦力のお前に何かあれば、士気が落ちる。あいつらはここでやるし」

舌打ちをして、片付けと手配に戻る一真。
それらが終わり、4時となって協定通り一旦休戦。

「……で、一体何があった？」
「わかりません。気づいたら、廊下倒れてまして……」
「おいおい、まるで散々殴られた後で廊下に頭から叩きつけられたかの様なケガじゃないか！？　すぐ寝かせないと！　姫路、ハンカチか何か濡らして持ってきてくれ！」
「はっはい！」

終戦と同時に戻ってきた戦友達と、文字通りぼろぼろにされた明久の姿があった。

「全く、戦争じゃからと、本当にケガする必要はないというのに……」
「ちょ～ット当麻さん怒ったかな～」

「僕はそろそろ切れる寸前なんだけど」
「ああ……根本のヤロー、手段を選ばないにしても程があるだろ。そういえば、島田はどうした？」
「服に着いた血を洗うと言って、どこかへ行ったぞい」
「ふーん、服を洗う……ん？　血？」

その一言で、何が至らせたかはわからなかったが、何があったかは容易に想像がついた一真達だった。
余談だが、一真と当麻は明久の姿に異様なまでにデジャヴを感じ、その痛みがフィードバックされているかのように背筋が冷えたという。

「……それで、戦況は？」
「顔が青い事は置いておくとして、相手を教室に押し込んだところで休戦時刻じゃ」
「その辺りは、予想通りだな……だとしたら、やっぱり解せないな」
「じゃが、今の処は明久を除くとこれといった目立つ被害もないぞい」

瑞希に看病して貰っている、今だ目覚めぬ明久に目をやっての発言である。

「うっ……」
「ああ、気がついたか明久？」
「……」
「ん？　ムッツリーニ。何か変わった事があったか？」
「……（コクリ）」

気がついた明久に駆け寄ろうとした一真に、いつの間にかいたムッツリーニがそれを遮った

彼は今回出番が来るまで情報収集にいそしんでおり、警戒に当たっている。

「Cクラスが、試召戦争の準備を？」

「……（コクリ）」

「狙いはAクラスじゃないだろうから……大方、漁夫の利を狙うってところか？」

「んー、そういうことならCクラスと協定でも結ぶか。俺達が勝つとも思ってないだろうし、Dクラスを使えば難しい事でもないだろう」

と言うや否や、明久、一真、瑞希、ムッツリーニ、当麻、祐輝を伴い教室を出る。

その途中、美波と須川の2名も加え、一路Cクラスへ。

「Fクラス代表の坂本だ。このクラスの代表は居るか？」

「私だけど、何か用かしら？」

扉をあけると同時に、名乗りを上げた雄二に応えたのは、1人の女生徒。

「っ！」

その姿を見て、一真は昨日の光景を思い出した。

街中を、ある人物と共に歩くその姿。

「ああ、Fクラス代表として……」

「ちょっと挨拶に来たんだ。Cクラスの代表は美人だと聞いたから、是非ともお近づきになりたいと思ってな」

「なっ！？　……あっ、ああ。へえっ、聞いた通りに活動的な美人

じゃないか。ぜひとも、仲良くしてほしい」
「ちっ……あらそう？　ありがとう。小山友香です、よろしく」
「そうだ、小山、あそこにいる、俺たちと戦っている、Ｂクラスの代表様とその近衛部隊がいるのはどうしてだ？」
「ちょっと用事があってね。」
「そうか、ならそれは試召戦争の話じゃないんだな？」
「えぇ、まあ」
「そうか。ならいいやじゃあね～」

そうして、Ｆクラスの面々は帰っていった。

「作戦失敗か」

奥の方からＢクラス代表、根本恭二が小山に歩み寄った。

「どうやら彼、私達の事を知ってたみたいね？　神竜一真、破神当麻、大神祐輝、Ｄクラス戦や今日と、随分と目立つ戦果をあげたらしいじゃない？」
「関係ないな。たかが危険人物がどうあがこうが、俺達の勝利の算段はもう出来てるんだ」

そう言ってニヤリと笑みを浮かべ、ある封筒を取り出した。

一方、Ｆクラス面々は。

「どうしたのいきなり？」
「あいつ根本の彼女だ。Ｃクラス代表だってのは、今初めて知った」
「そうだったのか……危なかったな」

試召戦争に関わる一切の行為を禁じる。

その条文はこれが狙いだったのかと、雄二は舌打ちをした。

「それでどうすんだよ？　これじゃＢクラスに勝ったとしてもＣクラス戦だ。分が悪すぎる」

「それに関しては考えがある。心配するな」

「ある意味一番性質が悪いな。根本のクソヤローめ……さて、明日はどんな汚い手を使ってくる？」

彼は頭の中で、勝った暁に行うペナルティについて、模索を始めていた。

第8話　死神マフィアの力（中級）（後書き）

作者は、感想を、心よりお待ちしたいので、今回から質問をちょっとしてみたいと思います。

今日の質問

作者は、今「ギルティ　クラウン」という、アニメにはまっているのですが、みなさんは、どんなアニメが好きですか？

第9話　やってしまった。怒りを買った。

第9話

やってしまった。怒りを買った。

「今から昨日言った作戦を実行する」
「作戦って、Cクラス対策のか？」
「ああ、その為には、秀吉にこいつを着てもらう」

現在午前8：30、Bクラスとの戦争再開にはまだ早い時分。
教壇に立ち、そう宣言した雄二は文月学園の女子制服を取り出した。

「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」
「いや、そこは構うべきだと思うが、雄二の狙いはわかった。秀吉に優子になりすまして貰ってCクラスを挑発、攻撃の矛先をAクラスに向けさせるってところか？」
「その通り。お前ならまだしも、面識がないCクラスでは見破る事は不可能だ」

優子と秀吉は二卵性双生児だが、パッと見では家族ですら見分けがつかない程似ている。
ちなみに一真と当麻はふざけて間違えたりする物の、実際は2人を完璧に見分ける事が出来る唯一の存在。

「と言う訳で秀吉、用意してくれ」

「う、うむ……」

雄二から制服を受け取り、その場で着替え始める秀吉。
明久をはじめとするFクラス男子は、その着替えの光景に絶句。
ムッツリーニもすごい速さでカメラのシャッターを切り、その光景に釘付けとなる。

「よし、着替え終わったぞい。ん？　皆どうした？」
「さぁ？」
「……さあな？」

秀吉、雄二が疑問符を浮かべ、一真は呆れたようにその面々を見ていた。
それから雄二、秀吉、明久、一真、祐輝、当麻の６人は一路Ｃクラスへ。

ある程度まで近づいた処で、雄二、一真、祐輝、当麻、明久は身を隠す。
秀吉は姉になりすます事に、気を重くしつつＣクラスへ。

「ねえ、大丈夫かな？」
「秀吉なら大丈夫さ。増してなりすますのが優子なら、さぞや面白い事になるだろうよ」
「随分と楽しそうだな？」

何かと痛い目あわされてる優子になりすましての悪戯に、一真も期待を抑えきれない。
さて、どんな挑発をしてくれるのかなと、期待を込めて秀吉を見つめる。

深呼吸をし、表情を引き締めてCクラスの扉を開くと、まずは一言。
「静かになさい、この薄汚い豚ども！」
「おおっ、優子だ」
「え！？　優子さんって、あんなふうなの？」
「……本人には内緒な？　全身の関節壊されちゃうから」
以前一真は優子の家での姿をバラしかけて、全身の関節を壊される寸前にされた事があった。
それを言ったら、秀吉もそうなのだが……。
「な、なによアンタ！」
「話しかけないで！　ブタ臭いわ！！」
「おーおー、やれやれ、もっとやれ。優子はもっと高飛車にやるぞ？」
「すごく楽しそうだね」
「どうやらこいつ、普段木下優子に痛い目あわされてるクチらしいな」
にやにやと笑いを抑えきれない顔で、こっそりと囃し立てる一真。
それを見て、何やら妙な事に感づいた雄二と、複雑そうにそれを見る明久。
「あんた、Aクラスの木下ね？　ちょっと点数良いからって、良い気になるんじゃないわよ！　何の用よ！」
「私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！　増してブタ臭い貴女達なんて、豚小屋で十分だわ！」
「なっ！　言うに欠いて、私達にはFクラスがお似合いですって！

！？」

「おおっ、良い具合に冷静さを失ってるな。流石は優子だ」

「いや、あれ秀吉だよ？　というか小山さんの中では、Ｆクラス＝豚小屋みたいだね？」

「否定はできないがな」

楽しそうにそれを見る一真、少々呆れたように一真にツッコミを入れる明久。

雄二や祐輝も、それを苦笑しながら見つめる。

「手が汚れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの。ちょうど試召戦争の準備もしている様だし、覚悟しておきなさい。近いうちに、私達が薄汚いブタの貴女達を始末してあげるから！」

そう言い残し、靴音を立てながら秀吉はＣクラスの教室を出ていく。それと同時に、Ｃクラスから小山代表のヒステリックな声が響き渡る。

「これで良かったかのう？」

「ああ、本当に優子かと思ったくらいだ……本人には内緒な？」

「わかっておる。こんな事が姉上にばれたら、ワシも生きた心地がせんわい」

「だったらあそこまでやるなよ……まあ楽しませてもらったから良いけど」

２人とも、どこかすっきりした顔だった。

「Ｆクラスなんて相手にしてられないわ！　Ａクラス戦の準備を始

めるわよ！！」

「上手くいったな。流石は根本の彼女、ヒステリックな事で」

「ある意味お似合いかもね」

「ああ。性質が悪い者同士、嫌な組み合わせではあるがな」

明久、秀吉、一真、当麻、祐輝、はうんうんと、寸分違わず頷いた。

６人は一路、Ｆクラスへ。

「さて、副司令は秀吉に任せていいか？　俺は回復テストを受けた後で、先生を呼ばないといけないから」

「うむっ、任せるのじゃ。呼ぶのは“木村先生”かの？」

「ああ」

そして、ＢクラスＶＳＦクラス戦、再開

「ドアと壁をうまく使うんじゃ！　戦線を拡大させるでないぞ！！」

秀吉の指示が飛ぶ中での、右側と左側の扉でぶつかりあうＢクラス教室攻略戦。

代表の指示は、『教室内に敵を閉じ込めろ』であり、戦況的には順調。

「勝負は極力単教科で挑むのじゃ！　補給も念入りに行え！」

始まってから数時間、事は順調に進んでいるが、ここにきて異変が起こっていた。

「……」

本来秀吉より先に指揮を執る筈の瑞希が、一向に何かしようとしない。
それが大きく響き、戦線は危うかった。

「すまん、遅くなった！　状況を説明してくれ」

そこへ一真達が、木村教諭を伴い戦線へと復帰。
明久が状況説明を行った後に、秀吉から指揮権を譲り受ける。

「よし、秀吉と明久、姫路はこっちへ！　明久と秀吉は、木村先生を拉致されない様ガードしろ！当麻祐輝は前線突入！」
「「うん！」」
「承知した！」
「了解だニャー」

物理の木村教諭のフィールド内で指揮をとり、Ｆクラス勢は冷静さを取り戻し始めた。
昨日の事で、物理が一真の最大武器だと勘違いしている以上、そう簡単には手出しができないと見越してである。

「左側出入り口、押し戻されています！」
「古典の戦力が足りない！　援軍を頼む！」
「ちっ……明久、“あれ”を使え！」
「わかった！」

一真の指示を受け、明久は古典の竹中教諭に駆け寄り耳打ち

「……ヅラ、ずれてますよ？」
「っ！！　少々席をはずします！」

「よし、今のうちに体勢を立て直すぞ！！」
「すまんが戦線離脱だニャー」
「祐輝！当麻のカバー！」

文系相手では一真もリーチで分が悪く、指揮する側に回るしかない。
その上、主力である瑞希の行動がおかしければ、戦況的にも危うい。

「姫路さん、一体どうしたの！？」
「そ、その、なんでもないです」

明久が様子のおかしい瑞希に駆け寄った。
だが、それでも時は待ってはくれず、無情に戦況は変化していく。

「右側出入り口、教科が現国に変更されました！」
「数学教師はどうした！」
「Bクラス内に拉致された模様！」
「祐輝！こっちは任せろ。」
「うん。分かった一真！」

Bクラスには文系が多い為、状況的にも不利となった。

「一真、あれを使うべきじゃろうか！？」
「それはまだダメだ。姫路、頼む！」
「はっはいっ！」

瑞希がようやく動き、一歩前に……

「あっ……！」

動こうとしたが、急に動きを止めて俯く。

明久はふと、瑞希の視線を追っていき……根本の手にある封筒に目を付けた。

「あれは……！」

「どうした、明久？」

秀吉と一真と祐輝もその視線を追い、根元の手に握られている封筒に気がついた。

それを見て様子がおかしくなった事と、怯えたまま明久を見つめる瑞希の姿を見て、３人にはある程度の予測がついた。

（おそらく、明久宛のラブレターと言った処じゃろうな）

（ああ……あのクソ野郎、だからあんな協定を持ちかけやがったな。昨日の罠といい、やってくれる）

（ひきょうだな～）

協定の内容自体は、瑞希が居るからこそＦクラスにとって有利に働く。

だが動けなければ、Ｂクラスにとって圧倒的に有利に働く条件。

「姫路さん」

「は、はい……？」

「具合が悪そうだから、あまり戦線に加わらないように。試召戦争はこれで終わりじゃないんだから、体調管理には気を付けてもらわないと」

明久がなだめるように瑞希を戦線から外そうと説得。

その間秀吉と一真は頷きあい、一真と祐輝は明久のもとへと駈けだす。

「明久、行くぞ」
「うん！」
「僕は当麻に連絡する！」
「指揮はワシに任せるのじゃ、頼むぞ明久、祐輝！」
「あ……！」

明久と一真と祐輝は背を向けて、教室へと駈けだす。
そして……

「面白いことしてくれるじゃないか、根本君」
「へえっ、お前から皮肉聞くなんてな……協力するぜ？　相棒」
「ああ、頼むよ。相棒」
「殺すニャー」
「怒りがもう我慢できない」

一真が拳を差し出すと、明久もそれに合わせ拳を差し出し、打ち合う。それに祐輝と当麻が加わり
そして……。

「「「「あの野郎、ぶち殺す！」」」」

根本恭二は気づかない。とある3人を本気にしてしまったことを

第１０話　三神

第１０話
三神

「雄二！」
「うん？　明久に一真に当麻に祐輝か。回復試験ならさっさと席に着け」
「話がある」
「……とりあえず聞こうか」

Ｆクラス教室にて。
回復試験を受けている中で、ノートを広げて戦力分布を書き記す雄二。
突然戻ってきた四人に、いぶかしげに顔を向ける。

「根本君の着ている制服が欲しいんだ」
「……お前に何があったんだ？」
「明久、それじゃ誤解されるだろ。つまりだな雄二、ちょっとあのクソヤローにやってみたい面白い罰を思いついたんだ。だから根本の服をはぎ取って、捨てる必要がある。そう明久は言いたかったんだ」
「流石一真フォローが早いニャー」
「明久が変態になったかと」
「面白い罰？　……どんなだ？」

一真がひそひそと小声で雄二に説明。
話し終わった途端、雄二はそれはもう良い笑顔で頷いた。

「よし、良いだろう。良い余興になりそうだ」
「そうか……じゃあそれともう１つ、理由は言えないが姫路を前線から外してもらえないか？」
「っ！　……理由を言えない事は置いておくとしても、どうしてもか？」
「うん」
「いえないニャー」
「絶対ね」

一真や明久、祐輝、当麻とて、無茶を行っている事は理解していた。
瑞希はＦクラスの最重要戦力であり、彼女が居るからこその作戦でここまで来た。
だからこそ、それが原因で負ける事も十分あり得る話で、その責任を問われるのは代表である雄二。
普通、こんな頼みを受けられる訳などない。

「……条件がある」
「何だ？」
「明久、一真、祐輝、当麻、お前達が姫路の担う予定だった役割を果たせ。どうやっても良いから、必ず成功させろ」

四人は互いに顔を向け合い、頷き合った。

「わかった。絶対に成功させて見せる！」
「俺もだ。その役割はなんだ？」
「良い返事だ。仕事は簡単だ、根本に攻撃をしかけろ」
「皆のフォローは？」
「ない。しかもBクラスの出入り口は今の状態のままだ」

今現在、Bクラスの出入り口はどちらもが入り乱れての、乱戦状態。
そこを突破してのBクラスの広い教室の奥、そこに根本が居る。

「そうだ！　一真の……」
「無理だ。俺もあの人数でしかも腕輪はAのときにをしないと」
「あっ……そっか。じゃあ、どうすれば？」
「明久、お前は確かに点数は低いが、一真がお前を相棒と認めているように、俺もお前だけにあるムッツリーニや秀吉、一真の様な秀でている部分を信じている」
「じゃあ、俺たちは戦場を引っ掻き回すかニャー」
「行こう。当麻」

そういうと、雄二は立ち上がり教室の外へ。

「どこに？」
「Dクラスだ。例の指示を出してくる」

「僕にしか、出来ない……あっ！」
明久が、ふと或る事を思い出した。
観察処分者である事の利点と、ある配置について。
「何か、策があったのか？」
「うん！　一真達は先に戻って指揮を頼む！」
「……わかった。しっかりやれよ？」
「うん！」

作戦開始、３分前

「点数が危なくなったら下がれ！」
再び秀吉から指揮権を受け取り、指揮官として指示を飛ばす一真。
その立ち位置は物理教師のフィールド内。
「怯むな！　ここをしのぎ切れば勝てるんだ！！」
「一真、きつい！」
「こっちもだにゃー」
「お前ら！本気でやってもいいぞ」
「「よしきたあああああ」」
ドォン！　ドォン！
Ｄクラスの教室へと、明久が仲間数名と英語の遠藤教諭を連れて行ってから聞こえる轟音。
それが鳴り響く中で、一真は指揮官として奮起を続ける。

「一真、祐輝、当麻！」
「雄二！　それに、近衛隊！」
代表の雄二をはじめ、近衛部隊が合流。
「お前らいい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって、暑苦しいことこの上ないっての」
「どうした？　軟弱なBクラス代表サマは、そろそろギブアップか？」
「はァ？　ギブアップするのはそっちだろ？　神竜達はそろそろギブで、頼みの姫路さんも調子が悪そうだぜ？」
作戦決行が待ち遠しくてたまらない、そう思うには十分という程根本を睨みつける一真ら三人。
秀吉も同様で、姫路を汚い手で脅す方法を使われた以上、何としてでも勝ちたいと思っている。
ドォンッ！　ドォンッ！
「お前ら相手に姫路を頼る必要なんてないさ。それに神竜も、指揮に専念してさえいれば十分だ」
「けっ！　口だけは達者だな。負け組代表さんよぉ……さっきからドンドンと、壁がうるせえな」
「人望ないな。余所のクラスから嫌がらせなんて」
音が大きくなっていき、時間もそろそろ作戦決行時間。
雄二に視線を向け、頷くのを確認すると一真達はDクラスへと歩を進め始める。
「何だ、神竜一真、破神当麻、大神祐輝ともあろうお方が脱走かよ

？」
「わざわざ雑兵どもに構ってたら、疲れるだけだ」
「ゴミの分際で余裕ぶっこいてんじゃねえ！　まあ負ける瞬間を見ないだけ、ラッキーだろうがよ」

ゲラゲラと笑う根元に一発ぶち込みたいと思う一真だが、一先ずは自重。
一旦Ｂクラス前から離れ、Ｄクラスへ。
それを確認した後、雄二は号令をあげた

「……体勢を立て直す！　いったん下がるぞ！」
「どうした、散々フカしておきながら逃げるのか！」

一真達は木村教諭を伴い、Ｄクラスの戸を開く。

「だぁぁあぁぁあっっしゃあああああああ！！！」

ドゴォっ！！！！

「ンなっ！」

と同時に一真の目に入ったのは、明久の召喚獣がＤとＢの教室の壁をぶち抜く光景。
次には、根本の驚いた声。

現在向こうの戦力の大半は、雄二率いるＦクラス本隊を追って、教室から出払っている。
その為、代表の防備は薄い。

「くたばれ、根本恭二ィーー！」

明久をはじめ、美波達Ｆクラス遊撃隊は根元を打ち取るべく、駆け出す。

だが近衛部隊に阻まれ、足をとめた。

「は、ははっ！　驚かせやがって！　残念だったな！　お前らの奇襲は失敗だ！」

「下がってろ！　こいつらは俺が片付ける」

そこへ割り込んできたのは、壊された壁から入ってきた木村教諭を伴う一真。

明久達は先程壁を破壊する為に立ち合わせた遠藤先生を伴い、一真達から離れる。

「なんだ？　おまえ１人で近衛部隊とやりあう気か？」

「ああ。Ｆクラス神竜一真、Ｂクラス近衛部隊全員に物理勝負を申し込む。サモン！」

一真の掛け声と同時に現れる召喚獣。

その召喚獣の腕につけられている腕輪を見て、近衛部隊は驚くも……。

「たかが太刀で、これだけの人数相手に勝てるか！」

「たかが？　……その言葉、後悔させてやる！！」

『Ｆクラス　神竜一真　物理５９８点』

ＶＳ

『Ｂクラス　近衛部隊　物理平均１９８点』

「点数は関係ねえ、近衛全員で神竜を打ち取れ！」
「「「「おおおーーーっ！」」」」
一真の召喚獣が太刀を構え、振る。近衛部隊の召喚獣にではなく、その陣形のちょうど中心に。
「はっ！　どこを切ってやがる！？」
「・・・・・・・“桜炎双暗流”桜、三式、満開！そして、“空間爆発！”」
そういった途端、一真の召喚獣の腕輪が輝く。
それと同時に……
「え？」
切った部分が、敵召喚獣全員を巻き込む爆発を巻き起こす。
所々で召喚獣の悲鳴が響いては、戦闘不能となり消え去っていった。
一真の召喚獣が持つ理系の腕輪の特殊能力その一“爆発”
切った部分を起点とし、半径2メートルの爆発を引き起こす能力。
その破壊力はBクラスで防げる訳もなく、爆煙が晴れる頃には近衛の召喚獣は影も形もなくなっていた。
「うっ、ウソだろ！？　近衛部隊が、たった一撃で……？」
「ゴミと言われた分、利子付けて返してやる……覚悟しろ、根本恭二」
「うっ、うわああっ！」
ダンっ！　ダンっ！

エアコンが停止した故に、涼を求める為に開け放たれた窓。
そこから2人の人影が飛び込み、逃げようとした根本の前へと立ちはだかる。

「え？」

入ってきた人影は、ムッツリーニと体育の教師。
屋上からロープを伝って侵入してきたムッツリーニは、根本恭二へと歩を進める。

「悪いが、ここは貰うぜムッツリーニ？」
「すまないがこいつには」
「格の違いを見せないとニャー」
「……（コクリ）」

近衛部隊は全員が沈黙、ムッツリーニが現れ完璧に逃げ場を失った。

「Ｆクラス神竜一真、Ｂクラス根本恭二に物理勝負を申し込む」
「Ｆクラス破神当麻、Ｂクラス根本恭二に物理勝負を申し込む」
「Ｆクラス大神祐輝、Ｂクラス根本恭二に物理勝負を申し込む」

『Ｆクラス　破神当麻　物理５２９点』
『Ｆクラス　神竜一真　物理６９３点』
『Ｆクラス　大神祐輝　物理４３８点』
ＶＳ
『Ｂクラス　根本恭二　物理２０３点』

「俺達に狙われた時点で、この運命は既に決まっていたんだ」

「“守り神”大神祐輝、“スターダストスラッシャー！”」
「“破壊神”破神当麻、“バースト”」
そう言って、祐輝の翼から、８本のレーザーが、当麻の投げワイヤーナイフが一本一本爆発する。
「“死神”神竜一真、桜炎双闇流、闇、二式、暗閃、“人炎爆発”」
今言葉によって、根元の召喚獣は、内部から爆発した。
「お前の間違いはただ一つ。俺たちを…」
「「「本気にさせたことだ！」」」
一真がの召喚獣が太刀をゆっくりと下ろし、そのまま解除されたフィールドと共に消えていった。
「すごいよ！　一真たちにあんな火力が加わるんなら、もう天下無敵じゃない？」
「精密攻撃と爆発に、レーザー、内部爆発……考えられる限りじゃ、最恐最悪の組み合わせね」
「ああっ。危ない物に危ない物をだな」
「おいコラ！　明久以外は罵倒が混じってるじゃねえか！！」
「最悪のほめ言葉だニャー！」
「もはや褒められてないよ！」
今ここに、Ｂクラス戦はＦクラスの勝利をもって、終結した。

第１１話　終了のＢクラスそして…（前書き）

問題
『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希、大神祐輝の答え
『Ｃ６Ｈ６』

教師のコメント
簡単でしたかね

土屋康太の答え
『ベン＋ゼン＝ベンゼン』

教師のコメント
君は化学を舐めていませんか

吉井明久の答え
『Ｂ－Ｅ－Ｎ－Ｚ－Ｅ－Ｎ』

教師のコメント
後で土屋君と一緒に職員室に来るように

神竜一真、破神当麻の答え
『祐輝任せた（ニャー）』

教師のコメント

君も後で職員室に来るように。

第１１話　終了のＢクラスそして…

第１１話

終了のＢクラスそして…

終戦後のＢクラスにて。

「明久よ、随分と思い切った行動に出たのう」
「うぅ……痛いよう、痛いよう……」
「大丈夫か？」
「にゃはははははＨっは」
「当麻笑いすぎ」

痛みのフィードバックで、両手を抑えて呻いている明久。
召喚獣でやったとは言え、鉄筋コンクリートを壊したフィードバックは、相当なもの。

「ま、でもお前らしい作戦だな」
「で、でしょ？　もっと褒めても良いと思うよ？」
「後の事を考えず自分の立場を追い詰める、男気溢れる素晴らしい作戦じゃな」
「……遠まわしにバカって言ってない？」
「そんなことないよ、明久は結構がんばった」
「おかげで俺達が攻撃できたニャー」

明久の作戦は当然問題にならない訳もなく、放課後は職員室で過ごす事が決定。
初犯でなければ、留年や退学も大いにありうる事である。

「ま、それが明久の強みだからな」

そこへ雄二が歩み寄って、明久の肩をバンバンと叩く。
明久の方は、バカが強みと言われ多少ショックを受けていたが……。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談と行くか。な、負け組代表？」
「では不貞腐れたクソヤロー君、覚悟は良いかね？」
「「人をはめようと脅した罰だ（にゃー）！！」」
「……」

雄二と一真達の視線の先には、先ほどまでの強気がウソの様に大人しくなった根元が床に座り込んでいる。
それを見る一真は、実に楽しそうだった。当麻と祐輝は、一真を心配そうに見ていた。

「本来なら設備を明け渡して貰い、お前らには素敵な卓袱台をプレ

ゼントする所だが、特別に免除してやらんでもない」
雄二の発言に対して、周囲が騒ぎ始める。
Ｆクラスは当然として、敵側の面々も。
「落ち着け皆。前にも言ったが、俺達の目標はＡクラスだ。ここがゴールじゃない」
「ここはあくまで通過点でしかない……そういう事だろ？　代表」
「ああ。だから、Ｂクラスが条件を呑めば解放してやろうと思っている」
「本当ならどっちもやってやりたいくらいなんだがニャー」
一真と当麻の補足も合わさり、Ｆクラスの面々は雄二の性格を理解し始め、納得した表情となった。
Ｂクラスも３ヶ月間ボロボロの教室に縛られる可能性からの脱却ともあり、雄二に視線が集まる。
「……条件はなんだ？」
「条件？　それはお前だよ、負け組代表さん」
「俺、だと？」
「ああ。お前には散々好き勝手やって貰ったし、正直去年から目ざわりだったんだよな」
と、普通に聞けば雄二の言葉は酷い言い様だが、彼はそれだけの事をやってきた。
その証拠にＦクラスどころか、Ｂクラスの面々も誰１人としてフォローしようとしない。
「そこで、取引だ。Ａクラスに行って、試召戦争の準備が出来てると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやって

も良い。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争が避けられないから、あくまで戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」
「……それだけでいいのか？」
訝しげに尋ねる根本に、一真は冷たく言い放つ。
「ああ……だが残念な事に、お前にはさっき最悪の罵倒をされたんで、それ相応の罰を受けてもらう」
「そういう事だから、Ｂクラスがコレを着て先程言った通りの行動をしてくれたら、見逃そう」
「根本がこれ着ないと、この教室とばいばいだニャー」
「残念だったねＢクラスのみんな」
そう言って雄二が取り出したのは、秀吉の変装の為に用意しておいた女子制服。
雄二の方も、どこか楽しそうにしていた。
「ば、バカな事を言うな！　この俺が、そんなふざけた事を！」
「Ｂクラス生徒全員で、必ず実行させよう！」
「任せて！　必ずやらせるから！」
「それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！」
懐から木刀を取り出そうとした一真だが、Ｂクラス面々の主張に手を止めた。
慌てふためいていた根本だが、その面々の同調にさらに慌てふためき始める。
「やっぱり随分と評判が悪いな、お前は」
「んじゃ、決定だな」
「くっ！　よ、よるな変態ぐふぅっ！！」

逃げようとした根本だが、Ｂクラスの面々が取り押さえ腹部に一撃。

「とりあえず、黙らせました」

「お、おう。ありがとう」

「手間が省けた。明久、早速着付けに入ろう」

変わり身の早さに、雄二もあっけにとられた。

が、すぐに気を取り直した一真は、明久とで早速着付けに移り始める。

「……男の服を脱がすって、思った以上に苦痛だな」

「うん……けど、これも目的のため」

２人してゲンナリとしつつ、服を脱がしていく。

まあ男が男の服を、それもクズ相手なのだから無理もない。

「うっ、うう……」

「ん？　明久、ちょっと離れるニャー」

「うん」

うめき声を上げる根本から明久を離し、エアガンを取り出す。

「寝てろ」

「がふぅっ！！」

一発で、急所を突いた。

根本の服をすべて脱がしたうえで、一真と明久は女子制服をあてがう。

「うーん……これどうやって着せるんだろ？」
「その前に、順序はどうなんだ？」
だが男子制服と勝手も違う為、全然わからず難航し始める。
「私がやってあげるよ」
「そう？　じゃあ折角だし、可愛くしてあげて」
Ｂの女子相手に、明久はそう提案するも……。
「それは無理、土台が腐ってるから」
だが否定する様に手を振って、笑顔でそう言い放った。
「酷い言い様だな……それじゃ明久、さっさと根本の制服捨ててから手を消毒しよう」
「一真、そっちの方が酷いよ……じゃあ、よろしくね」
「そうだ、これ消毒液だ。着替えさせたら使うといい」
「ありがとう」
消毒液を渡した後、２人してＢクラスを後に。
それから明久が根元の制服を探り、ある封筒を取り出した。
「あったあった」
嬉しそうに封筒をポケットに入れて、用がすんだ制服は近くにあったゴミ箱へ。
彼は家まで女子制服の着心地を楽しむ事になるだろう。
そして２人は、手の洗浄および消毒を行った後Ｆクラスへ。

「それじゃ俺は帰るから」
「うん！　じゃあまた明日」

一真は鞄を手に、明久も瑞希の卓袱台と駈けだしていった。
Fクラスを出て少し後に、瑞希が教室に入っていく姿を見つけた一真はにやりと笑みをうかべる。

「さて、明日の報告が楽しみだな」
「まあにゃー、あの鈍感王子だからニャー」
「まあ明久じゃから、あまり期待は出来んじゃろうがな？」
「「ん？　ああ、秀吉か」」

ふと横を見ると、秀吉の姿が。

「でもある意味、面白くはあるだろ？　実は雄二ではなく自分だった……って後で知ったら」
「あはははははうくくくくくくあああはははh」
「確かに面白そうじゃな。さて、帰るとしようかの？当麻だいじょうぶかの？」
「ああ」

「こっ、この服、やけにスカートが短いぞ！？」

ふと、聞こえて来た叫び声。
見てみると、そこには女子制服を纏い髪にリボンを付けた、根本氏の姿が。

「はっ、吐きそうじゃ……」
「ああっ。提案しといてなんだが、おぞましい」

ヒューパタ

「あっおい当麻」

「きっ、貴様は神竜！　よくも俺にこんな事を！！」

第一印象を言い合ってると根本が気付いて突っかかろうとするが、付き添い2名に取り押さえられる。

一真と当麻は懐にやった手を戻し、笑顔で御苦労さまと労う。

「すまない神竜、これから撮影会があるから急がないといけないんだ」

「きっ聞いてないぞ！？」

「それはそれは。写真が出来たら送ってくれ、2度と舐めたマネをしない様しっかり管理するから」

「俺にもニャー」

付き添いの2人が笑顔で頷く傍らで、根元は忌々しげに神竜と破神を睨みつける。

「神竜一真、破神当麻この恨みは必ず返してやる！」

「無駄口をたたくな！！　ほら、キリキリ歩け！」

「くっ……覚えていろ、絶対にこの事を後悔させてやる！！」

と、見事にお決まりの台詞を残して、去って行った。

「さて、帰るか？」

「うむっ……ところで一真よ、しばらく家に泊めてもらえんかの？」

「え？　何で？」

「……今朝の事じゃ。あれが姉上にばれたら、ワシは車椅子か寝た

きりにされてしまうのじゃ」
「そうだニャー」

ふと、秀吉が優子になりすまし、Ｃクラス相手に散々罵倒した事を思い出す一真と当麻。
あれが優子にばれたら……

「……じょっ、冗談はよせよ。俺まで共犯にされちまうかもしれないだろ」
「何を言うのじゃ一真。これはＦクラスの作戦であるから、お主も同罪じゃ！」
「だったらお前も悪のりするなよ！」
「お主も楽しんだであろう？　頼む一真、ワシを見捨てんでくれ！」
「にゃはははははは」
「お前も家来い当麻」
「なんでにゃー！？」

涙目で上目使いに懇願する秀吉に、流石に一真も何も言えなくなる。
そこで当麻を巻き込んだ

「……わかったよ。じゃあ早速優子に会う前に」
「そうだにゃー当麻さんも朱里にばれたら」
「「アタシがどうかしたの？」」
「「「ぎゃあっ！！」」」

突然割り込んできた声に、３人は心臓を鷲掴みされるかのように驚いた。
話題の中心人物である優子、朱里その人である。

「しっ心臓が……止まるかと思った、ぞい」

「いっ、いきなり声をかけるなよ優子……びっ、ビックリした」
「ほんとに死ぬとこだったニャー」
「？　なんだかよくわからないけど、ごめん」

その様子を見て、まだCクラスからの宣戦布告はないらしい。
そう安著し、深呼吸。

「「いや、こっちも悪かった」」
「「そう。それじゃ一緒に帰りましょ？」」
「あれ？　一緒に？」
「あんた達を3人で居ると誤解されるから。5人一緒の方がわかりやすいのよ」

一真は優子より、秀吉の方と仲が良い。当麻は別
実は噂の大半は秀吉を優子と誤認してのものだった。

「お前も大変だな」
「全部アンタ達の所為でしょ！」
「その言い分はあまりにも理不尽じゃ姉上」

多少機嫌が悪そうな優子を伴い、靴箱へ。

「で、Bクラス戦はどうだったの？」
「勝ったけど、どうかしたか？」
「……設備の入れ替えは？」
「さあ？」
「代表の一存だニャー」

優子の質問を、のらりくらりとかわす一真と当麻。

「……もしかして坂本君は、Ａクラスが狙いなのかしら？」
「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。でも戦争は勝算があるからこそ仕掛けるものだろ？」
「そうだけど……じゃあ、大丈夫かしらね？」

Ａクラス代表にして学年首席、霧島翔子。
彼女に太刀打ちできるのは、Ｆクラスにおいては姫路瑞樹と一真と祐輝。
単科目で言えば、保健体育でムッツリーニと当麻と言ったところ。

しかしそれ以前に、Ａクラスの戦力は当然Ｂクラス以上。
ハッキリ言って、雲の上の存在。

「まあ出来れば、静かにして貰いたいわね。Ｃクラスも殺気立ってる様だし」
「……そうだな。そうしたいところだな」
「……そうじゃの」
「……まあこわいにゃー」
「「？」」

Ｃクラスという単語を聞いた時点で、３人は狼狽し始めた。
が、何の事かわからず、その場は適当にごまかされる。

「そうじゃ姉上、しばらくじゃが友人の家に泊まる事にしたぞい」
「そう？　……なんか怪しいわね？」
「俺も泊まるニャー」
「へー、そうなの」

その次の日。

「……優子、どういう事か理由を説明して」
「そっそれは、アタシにもどういう事かさっぱり……まさか！」
「そうだ！優子あの感じだと」

Cクラスからの宣戦布告で、優子と朱里はその理由を知ることとなった。

その日から一真、当麻、秀吉は背筋に殺気を感じるようになった。

第１１話　終了のＢクラスそして…（後書き）

パソコンと自身の事情により、週に一度の更新になると思います。

今日の質問

みなさんの、好きな曲はなんですか？

第１２話　決戦ナンバーＡ（前書き）

問題
ゲームセンターにある、設置型サッカーゲーム。ＷＣＣＦの正式名称を答えなさい

神竜一真　破神当麻　吉井明久　坂本雄二　大神祐輝の答え

『ワールドクラブチャンピオンフットボール』

教師のコメント
まさか、あなた達がまじめに答えるとは！！まったくいつも答えればいいのに……

姫路瑞希の答え

『この問題、何の教科の問題ですか？』

教師のコメント
すいません！あの５人にまじめに答えさせる問題だったので、何の教科でもありません。

第１２話　決戦ナンバーＡ

第１２話

決戦ナンバーＡ

補給試験も終わり、本日いよいよＡクラスへの宣戦布告を控えた日。秀吉と当麻は姉と幼馴染の脅威から逃れるべく、一真の家で命の保護と勉強会。

「すまぬのう……」

「悪いニャー」

「いや……考えてみたら、お前らの姿がないのは不安を煽られるから」

彼らはクラスを救うある作戦の副作用に怯えつつ、日々を過ごしていた。

「さて、今日はいよいよＡクラスへの宣戦布告だ。あの卓袱台と腐った畳、座布団とお別れか」

「もしくは、敗北してあれよりもひどくなるか……じゃの？」
「一発博打だにゃー」
「オー怖い」

試験召喚戦争は、下位勢力が敗北した場合は設備を1ランク下げられる。
Fクラスが最低であるから、負けた場合は具体例はない。

「まあ泣いても笑っても、今日で運命はきまるんだ。頑張ろうぜ？」
「そうじゃの……むっ、一真よ。あれは明久と祐輝ではないか？」

秀吉の視線の先には、交差点に差し掛かっている明久と祐輝、実はこの二人家が近い。

「ん？　おーい明久ー！祐輝ー！」
「あっ、おはよう一真、秀吉、当麻」
「おはよう3人とも」

ドンっ！

「わっ！」

そこで、明久は誰かとぶつかり尻もちをついた。

「あいたたた……ごっごめんなさい」
「あっ、こっこちらこそ……っ！　君は、Fクラスの吉井君！？」

明久がぶつかった人物は、明久に気がつくと顔を赤らめた。
その熱のこもった視線を向けられた明久は、背に妙な寒気が走る。

「なんだ、どうした？」
「どうしたのじゃ？」
「貴様、Ｆクラスの神竜一真！？」

一真と秀吉が駆け寄ると、久保は一真の姿を見るや否や、敵意をこめて睨みつけた。当麻と祐輝はあっけに取られている

「ん？　ああ、確かＡクラスの」
「いかにも、学年次席の久保利光だ」

指でメガネを直し、キリッとした佇まいを見せる久保利光。
Ａクラス所属、学年次席にして同性愛趣味を持ち、吉井明久（♂）に好意を抱く男。
その目は、明久に熱烈な視線を向けている。

「ほら明久、立てるか？」
「あっ、うん。ありがと」
「なっ！？　……なんて羨ましい」
「何ボーっとしてんだ？　あんたこの時間、いつも教室で予習してんだろ？現学年次席。」
「っ！　……そうだったな。では、失礼する」

名残惜しそうに明久を見て、その次に一真を射殺す様な視線で見る久保氏

「……おのれ神竜一真！」

と、密かに呪詛をぶつけて、去って行った。
彼の姿が見えなくなるや否や、明久は急にほっと一息をついた。

「どうした、明久？」
「気の所為か、久保君に会ってからの妙な寒気が、治まった気がするんだけど……？」
「それはお前が正常である証拠だ」
「うむっ、むしろ喜ばしい事なのじゃ。気にするでないぞい」
「ははあれはやばいね」
「末期症状ニャー」

秀吉達がうんうんと頷くのをみて、首を傾げる明久だった。
その様子を見て、一真は言い様のない感情が腹の中で渦巻くのを感じた。当麻と祐輝が心配しているのを見てその感情も消えうせたが、

「それよりも一真よ。やはり久保には嫌われておるのう」
「だろうな。相棒と宣言してるから、面白くないだろうことは理解できるけど」
「それに加えて、校内ではお主と明久の絡み合う本が、ベストセラーとして出回っておる始末じゃ」

“バカとマフィアとバラの世界”（明久×一真　本人許諾なし）
文月学園の腐女子の間では、ダントツのベストセラーとして人気の一品である。

「……僕と、一真が？」
「ちなみに2番目が明久と雄二で、3番目は一真と当麻その後に一真と雄二、当麻に大輝と続くそうじゃ」
「おえっ……何であのゴリラ野郎が出て、お前が出てこないんだ？そして何故俺こんなに出る回数多い　それにどうしてお前がそんな事知ってる？」
「ワシに聞かれても困るぞい。演劇部で女子部員がその手の話をしておるのを聞いたのじゃ」

朝から知りたくない世界を知ってしまい、吐き気が治まらなくなった一真達だった。

そして、Ｆクラス教室にて。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中に不可能だと言われていたにも関わらずここまでこれたのは、他でもない皆の協力があっての事だ。感謝している」
「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ？」
「ああ、自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」
「でもまだ早いぞ？　そういうのは、終わってから言うもんだ」
「ああ。ここまで来た以上、絶対にＡクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突き付けるんだ！！」

雄二の宣言で、Ｆクラス全員が歓声を上げた。

「おおーっ！」
「そうだーっ！」
「勉強だけじゃないんだーっ！」

Ｄクラス、Ｂクラス相手に勝利した自信が、彼らを奮起させていた。全ては雄二のシナリオ通りに事が進んでいる事も、それを大いに助長させている。

「皆ありがとう。そして残るＡクラス戦だが、これは一騎打ちで決着を付けたいと考えている」

主要メンバーは既に耳にしており驚きはしなかったが、他はざわめき始めた。

「どういう事だ？」
「誰と誰が一騎打ちするんだ？」
「それで本当に勝てるのか？」

当然、いきなりこんなことを言われれば、動揺するのも無理もない。だが雄二はそれに構わず、机をたたいて皆を鎮める。

「落ち着いてくれ、それを今から説明する。やるのは当然、俺と翔子だ」
「バカの雄二が勝てる訳ない……」

ヒュッ！　（カッターが投げられた音）
カシンッ！　（カッターがエアガンとナイフに弾かれた音）
トンッ、カラカラ！　（カッターが畳に落ちる音）

「一真、当麻、祐輝、邪魔をするな」
「明久の言い分も最もだろ。カッターを投げる暇があったらさっさと説明しろ」

雄二の視線の先には、エアガンを構えた一真と祐輝ナイフを構えた当麻。
その銃口は、カッターの射線に向いていた。

「……まぁ、その通りだ。まともにやり合えば勝ち目はないかもしれないが、それはＤクラス戦もＢクラス戦も同じだっただろう？
まともにやり合えば、俺たちに勝ち目はなかった。今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、Ｆクラスは Ａクラスを手に入れる。俺達の勝

ちは揺るがない……俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる！」

「「「おおおぉーーーーっ！！」」」

信頼の証として、全員が雄たけびを上げた。

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちは、フィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？　何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ。ただし、内容は小学生程度、方式は１００点満点の上限あり。召喚獣勝負ではなく、純粋な点数勝負とする」

試験召喚戦争は、テストの点で雌雄を決する物である。

だからこそ、テストの点を用いた勝負であれば、方法次第では採用される。

「でも同点だったら、きっと延長戦だよ？　そうなったら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？　幾らなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などというものか」

「じゃあ、この作戦のからくりは一体何なんだ？　もったいぶってないで教えろよ」

「それもそうだな。それはある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ」

確実に間違える問題。

それを聞いて、全員が静まった。

「その問題は……“大化の改新”！」
「大化の改新？　誰が何をやったみたいな問題、小学生でやったか？」
「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。単純に年号を問う問題だ、その問題が出たら俺達の勝ちだ」
「大化の改新・・・・蒸しご飯だから６４５年だニャー」
「ああそうだ。これは当麻でも間違えないどころか明久でも間違えない。」

ちなみに神竜一真は、日本史を大得意科目の科目の１つとしていた。
ちなみに明久は、それを聞いて顔をそむけたのは別の話。

「だが、翔子はお前が今言った年号に絶対に間違える！　これは確実だ、だからその問題が出たら俺達の勝ちだ！　はれてこの教室とはおさらばだって寸法だ！」

そこまで断言するあたり、信用する価値はある。
そう結論付けるには、十分な自信を持つ雄二の姿だった。

「あの、坂本君？」
「ん？　なんだ、姫路」
「霧島さんとは、仲が良いんですか？」

それを聞いて、明久は訝しげに雄二を見た。
姫路瑞希にも好かれていて（明久視点）、学年首席の霧島翔子とも良い関係かもしれない。
それを彼が許せるかは……

「ああっ。俺と翔子は“幼馴染”だ」

答えは“Ｎｏ”である。

「総員、狙えええ！！」

その言葉に明久は激高し、号令を上げた。
それを受けてクラスメイト達は、アサルトライフルやマシンガン、ゴムナイフを雄二に向けて構え始める。

「なっ！？　何故明久の号令で急に構える！？」
「黙れ男の敵！　Ａクラスの前に貴様を殺す！！」
「俺が何をしたと！？」
「待て！　それ全部俺と当麻のコレクションじゃねえか！　いつの間に抜き取った！？」

一真と当麻がいつも持ち歩いてるボストンバッグとベルトが、いつの間にか空となっていた。

「ごめん一真、当麻、でもあいつを抹殺するにはこれが良いんだ！」
「だったら弾代含めてレンタル料１人１０００円出せ！」

という言葉に、全員が一真と当麻に向って千円札を手渡す。
（明久を除いて）人数分ある事を確認したら、ゆっくりと自分の席に座った。

「一真、当麻！　てめえ俺を助ける為に止めたんじゃなかったのか！？」
「これをコレクションなしでどう止めろってんだよ？流石にけりじゃこの数はむりがあるぞ？」
「この役立たずが！」
「良いかみんな、射撃というのはだな？」

「何射撃の講義始めやがんだ！？　しかもいつの間にお前まで構えやがった！！？」

いつの間にか木刀を持ち、それを雄二に向けて構える一真。
その手をそのままに、射撃についての講義を始めた。

「そっそれより、一真と当麻だって木下優子と水野朱里と幼馴染だろ！？」
「「ちょっ、それは今関係ないだろ（にゃー）！」」

明久を除く級友が彼にも殺意を向け、半分が一真と当麻と祐輝にも銃を構えた。

「ちょっ、ちょっと待て！　優子とはもう何でもないぞ！！」
「俺は朱里をそんな風に見たこと無いにゃー」
「もうって、まさか一真、木下優子さんといい関係だったとか！？」
「それは違うのじゃ明久。一真は姉上にフラれておるのじゃから、そんな事ありえん当麻もそんな関係ではないのじゃ」

時が止まった。

「ひっ、秀吉？　一真、今にも崩れそうなんだけど……？」」
「え？　……あっ、すっすまぬ……」
「秀吉…一真はデリケートなの忘れたかニャー？」
「一真！っやばい。一真の持ってきている布団に入れよう。」

古傷をえぐられ、その場にうずくまってしまう一真。
その姿を見て、原因を作った張本人は罪悪感を感じる。

「……まあ、その、なんだ……一真、すまなかった」

「……昔だよ。気にするな……っどうせ俺は、ごにょごにょ」
「そっか……幼馴染だからって、それが良い関係であるとは限らないんだね」
「みんなきをつけるにゃー、一真は超デリケートだニャー」
その姿に何も言えなくなり、全員が銃を下した。

「あの、吉井君？」
「ん？　何、姫路さん？」
「吉井君は、木下さんや水野さんや霧島さんが、好みなんですか？」
「そりゃ、まあ。美人だし……えっ、どうして姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの！？　それと美波！、どうして君は僕に向かってなんて危険な物を投げようとしてるの！？」
攻撃態勢を取る瑞希と、教卓を持ち上げて明久めがけて投げようとする美波。
その2人に問い詰められ、明久の命は風前のともしび。

「とにかく、俺と翔子は幼馴染で、小さい頃間違えてウソを教えたんだ」
「それが、大化の改新かの？」
「そうだ。アイツは1度覚えた事は、決して忘れない。だから今、学年トップの座にいる。だが俺はそれを利用し、アイツに勝つ！
そうしたら俺達の机は……」

「「「システムデスクだ！」」」
その傍らでは、テンションは最高潮だった。
「今から宣戦布告に行くぞ、ムッツリーニと秀吉も用意しろ」

「　っ！すまんがわしはかんべんしてくれんかのせめてもの侘びに一真をおこさないといかんのじゃ」
「俺も何とかしないとニャー」
「ふーン、じゃあ頼んだ」
明久、瑞希、美波、ムッツリーニ、祐輝を伴った雄二は、一路Ａクラスへ。

「本当にすまんかった」
「いや、良い……もう吹っ切ってたはずなんだけどな」
「すまぬな……さて、雄二達は大丈夫じゃろうか？　特に姫路が心配じゃ」
「ああっ、あの噂か？」

霧島翔子と水野朱里は、言いよって来る男性を軒並み断っている。
その事から、同性愛主義者という話が囁かれていると言う。

「所詮噂だろ？　幾ら言いよって来る男を軒並み断ってるとは言え、安直過ぎる噂だと思うがな」
「それもそうじゃが、万が一という事もあり得るぞい」
「いや、万が一が一般的になってる方がおかしくないか？　幾らこの学園は変人が多いとは言え」
「言われてみれば、そうじゃな」

その後、戻ってきた雄二達から勝負方式が伝えられた。
１０時より始め、一騎打ち７回で４回勝った方の勝ち。
教科選択権は、Ｆクラス４回でＡクラス３回。

Ｆクラス　ＶＳ　Ａクラス
バカ対エリートの戦いが、今始まる。

第１３話　最強のＡクラスＶＳ最弱のＦクラス（前書き）

問題
『バルト三国と呼ばれる国名をすべてあげなさい』

姫路瑞希の答え
『リトアニア、エストニア、ラトビア』

教師のコメント
その通りです

神竜一真、破神当麻、大和大輝の答え
『魏、呉、蜀』

教師のコメント
先生も三国志は好きです

土屋康太の答え
『アジア、ヨーロッパ、浦安』

教師のコメント
土屋君にとっての国の定義が気になります

吉井明久の答え
『香川、徳島、愛媛、高地』

教師のコメント

正解不正解の前に、数が合っていないことに違和感を覚えましょう

第１３話　最強のＡクラスＶＳ最弱のＦクラス

第１３話

最強のＡクラスＶＳ最弱のＦクラス

「改めてみると、すごいな」
「だよね」
「っまあ、これが俺らのものになるならいいんじゃないかニャー」
巨大サイズのプラズマディスプレイ、人数分用意されたシステムデスクにリクライニングシート。
パソコンや個人用エアコンや冷蔵庫まであり、その中身も学園側で管理。

「しかも担任が美人で才女の高橋女史と来れば、破格もいい所だ」
「私の担任するクラスになりたかったのなら、振り分け試験を趣味で休まなければ良かったのです」
「ご最もで、まあこれからここは俺らのモンだが」
立ち会いとなるのは、Ａクラス担任であり学年主任である、高橋女史本人。
「では、両名とも準備は良いですか？」

「ああ」
「……問題ない」

それぞれの代表が、決意表明。

「それでは、1人目の方、どうぞ」
「わしがいこう」
「アタシから行くよ」

Fクラスから真っ先に名乗り出たのは木下秀吉。
対するAクラスはその幼馴染である木下優子。

「科目は何にします？」
「ちょっと待って」
「？　……どっ、どうしたんだ、優子？」
「ちょっと話があるんだけど、良いかな？　一真も」
「えっ！？　あっ、姉上？　せめて、この勝負が終わってからで構わんかの？」
「じゃあ一真は後でいいわ。大丈夫よ、すぐ終わるから」

逃げようとした秀吉を取り押さえ、そのまま優子は教室の外へ連れ出す。
助けを求める秀吉に、一真は頭を下げた。

「全員秀吉に合掌……」

「アンタ達、Cクラスで何してくれたのかしら？　どうしてアタシがCクラスの人たちをブタ呼ばわりしてる事になってるのかなぁ？」
「それは、姉上の本性をワシなりに推測して……あ、姉上！　ちがっ、その関節はそっちには曲がらなっ……！！」

ガラガラガラ！

「秀吉、急用ができたから帰るってさっ」
「世間一般では、急用じゃなく救急と呼ぶんじゃないか？」

一真にとって、それは死刑宣告だった。

「……せめて、話し合う余地くらいは欲しいんだが？」
「なあに？」
「……いえ、何でもありません」
せめてもの抵抗だったが、優子の良い感じの笑顔に二の句を告げられなくなった。
ついでだがAクラスの面々に、過激派筆頭の意外な一面を垣間見た。

「で変わりを出して欲しいんだけど」
「いやうちの不戦敗でいい」

雄二も優子の恐ろしさにきずいたらしい

「ではまずAクラスが一勝」

Aクラスに一勝目がささげられる。

「そういえば当麻の声が聞こえないわね」
「一真もさっきから聞こえないんだけど」

優子と朱里が異変に気づいたらしい、祐輝が雄二にアイコンタクト

で何かを伝える。

「それはいえないな。Fクラスのためにも」
「ふーん、そうじゃあ次の人お願いできる？」

そういって出てきたのは小さくてかわいいなぜか大人びた少女。

「っちもう出てきたか“柴崎彩夏”元2年学年次席」
「えっ雄二、二年の学年主席ってどういうこと？」
「あいつはとある事件で留年したのさ、さて明久逝って来い。」

雄二が明久を指名する。そして明久がうろたえるがすぐにかっこつけだしてやり取りがおこなわっれる。

「ふっ雄二それは僕に本気を出せということなのかい」
「ああそのとうりだお前の本気を見せてやれ」
「ッままさか吉井君、君はもしや…」

彩夏がうろたえ始める

そして――――――――
「僕は実は左利きなんだ」

～しばらくお待ちください～

「いたい美波、ただでさえフィードバックで痛んでるのにそれ以上痛めつけないで、ていうか雄二僕を信用してるんじゃなかったのか」
「信用？何それ食えんの？」
「この野郎！」

Ｆクラス名物吉井明久と坂本雄二による公開漫才が行われた。
「あはは、吉井君君面白いね、一真君も面白いけど、いや彼の場合はかっこいいかな？」
ピキッと空気の凍る気配、Ｆクラス全員が一真に対し攻撃姿勢をとる。一真は一応Ａクラスには見られてない
「やめろお前ら！今の一真に何かしたら死ぬぞ！」
雄二の声がかかり全員攻撃姿勢をやめた。と思われたが一部が攻撃して、吹き飛ばされた。Ａクラスは何をしているんだろうと恐れた
「では、３人目のかたどうぞ」
「……（スック）」
「じゃあ、ボクが行こうかな？　１年の終わりに転入してきた工藤愛子です、よろしくね」
Ｆクラスからは、ムッツリーニ事土屋康太。
Ａクラスからは、ショートカットのボーイッシュな女の子が出て来た。
「教科は何にしますか？」
「……保健体育」
「土屋君だっけ？　随分と保健体育が得意みたいだね。でも、ボクだってかなり得意なんだよ？　……キミと違って、実技でね」
その言葉に、Ｆクラスの面々は沸いた。
そのうち、明久も例外ではない。

「そこのキミ、吉井君だっけ？　勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？」

「是非ご教授を……」

「吉井には永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんていらないのよ！」

「そうです！　永遠に必要ありません！」

「島田に姫路、って明久！」

明久蘇生中しばらくお待ちください

「っは！」

「セーフ！」

「それじゃあ一真君かな（ぼそ）」

試召戦争で精神的に死に追い込まれた人物は、おそらく後にも先にも明久だけだろう

「そろそろ召喚を開始してください」

「はーい。サモンっと」

「……サモン」

DにBと、出番がなかった忍び装束に2本の小太刀を持つムッツリーニの召喚獣。

そして愛子の召喚獣は、セーラー服に巨大な斧を持ち、その腕には腕輪も装備されていた。

「実戦派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

愛子の召喚獣が、腕輪を光らせて踏み込む。

斧が雷光を纏い、高得点で得たスピードで距離を詰め飛び上がった。
「それじゃ、バイバイ。ムッツリーニくん」
「……加速」
「え？」
突如ムッツリーニの召喚獣の姿が消え、相手の射程外に。
そして……
「……加速、終了」
ムッツリーニが呟いてから一呼吸置き、愛子の召喚獣が倒れた。
『Ｆクラス　土屋康太　保健体育５７２点』
ＶＳ
『Ａクラス　工藤愛子　保健体育４４６点』
「そ、そんな……！　この、ボクが……！」
相当ショックを受け、愛子は床に膝をついた。
「これで2対1ですね。次の方は？」
「あ、は、はいっ。私ですっ！」
「それなら、僕が相手をしよう」
Ｆクラスからは姫路瑞希、Ａクラスからは学年次席である久保利光。
「ここが一番の心配所だな」
「ああ……事実上の、学年次席争いってところか」

振り分け試験でリタイアこそしたものの、そうでなければどちらが学年次席の座でもおかしくはない。
それほど点数はほとんど同じだった。

「科目はどうしますか？」
「総合科目でお願いします」

と進言したのは、久保利光。
総合科目は学年順位がそのまま影響する。

「ちょっと待った！　それは……」
「構いません！」
「姫路さん……」
「信じてやれよ明久、Ｆクラスの姫路瑞希をよ」

『Ｆクラス　姫路瑞希　総合科目４４０９点』
ＶＳ
『Ａクラス　久保利光　総合科目３９９７点』

「ま、マジか！？」
「いつの間にこんな実力を！？」
「この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……！」

至る所から驚きの声が上がった。
点数差４００点オーバーなのだから、無理もない。

「ぐっ……！　姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ？」
「……私、このクラスのみんなが好きなんです。人の為に一生懸命な皆の居る、Ｆクラスが」
「Ｆクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです」
瑞希が礼をした後に、下がる。
祐輝に背を軽く叩かれた明久は、一歩前に。
「御苦労さま、姫路さん」
「……はい」
「……もしかして、杞憂？」
ただ1人、その光景を見て安心しつつ羨ましげに見ていた人が居た。
「これで2対2です。次の方の1人、どうぞ」
圧倒的勝利の上、敗北も殆ど運による物という結果。
Fクラスがここまでやるとは思っていなかったのか、高橋女史も若干焦りの表情を浮かべる。
「私が行きます」
そういって出てきたのは、水野朱里ここでFクラスの秘策が適用される
「当麻頼む。」
雄二が呼びに行き耳につけていたイヤホンをはずす当麻。それを見て朱里が驚愕する。
「さっ坂本君まさかさっきからとうまが喋らなかったのって」
「ああそうだ。ちなみに一真はそこでゲームしてる」

「っち！でもいいわ当麻だったら…先生政経でお願いします」
雄二、明久、一真、大輝Ｆクラス面々がしたうちする。なぜなら当麻は……
――――――政経がとてつもなく悪いからだ。
『政経　Ｆクラス　破神当麻　２点』
ｖｓ
『政経　Ａくらす　水野朱里　３８７点』
一瞬で決着がついた。
「当麻！お前もうチョイ粘れたろ、一真の時間稼ぎにもなんねはあほ！」
「そうだよ、一真のゲームが終わってないと僕ら不味いんだよ！？」
「僕がいけばよかった」
「ドンマイだニャー、もう一真は終わってるニャー」
その言葉にＦクラス面々は希望に包まれる。
「次の方前へ」
出てきたのは、短髪の少女だった。それと同時に一真がゲームをやめて出て行く。
「ん？あはははははは俺の相手はビビリ泣き虫かよオオおおオオ！！！さあさあさあさあ！優等生のカス共の！銀はがしの始まりだば～～～～か！はははっはははははははっはははは！」
「だれがビビリ泣き虫よ！私には、山口怜奈って言うちゃんとした

名前があるんだから！」
「はいはい、おら、さっさとやんぞこら！銀はがし！」
一真は心なしか言葉が乱暴になっている。明久は雄二に聞いた
「どうしたの一真？なんか言葉遣いが荒いような」
「あれはあいつが集中してんのさ、あいつは集中するとああなるんだ。近所の不良どもからは［集中モード］なんて呼ばれてる」
「教科は何にしますか？」
大半の生徒が物理で来ると思っているだろう。しかし、一真の得意なのは物理ではない。一真の本当に得意なのは
「日本史でお願いしますよ。高橋女子？くはハッハハハハあっはっは八はハア。」
「っは！あんたの得意科目は物理でしょ？嘗めてんの？」
「ちげぇよ、俺の本当に得意な科目は“日本史だ”バーカあーははははは！！！」
『日本史　Ｆクラス　神竜一真　９９５点』
ｖｓ
『日本史　Ａクラス　山口怜奈　４２１点』
『はい？』
会場にいるほぼ全ての人間が疑問の声を発する。
「９９５！ありえん」
「何て点だ！」

会場がざわつき始める。一真の召喚獣は今回は銃だ。

「さて、孤独のショウタイムだ！！どうやって剥がそうか？コインか？セロハンか？」

一真の召喚獣のマシンガンから大量の弾がピンポイントで怜奈に向かって飛んでいく。

「そんな、素手なんかで俺を倒せると思ってんじゃねえぞこら！！」

「素手？笑わせないで！“超電磁砲”（レールガン）！！」

怜奈の召喚獣の放ったコインから電気が放たれる、一真は慣れた手つきでそれをかわした

「っち！電気か！クソ！ならば……」

「簡単な話、これを放ちまくったらあんたに当たって吹き飛ぶ！」

「そう簡単にいくと思うな！」

一真のマシンガンから、大量のナイフが放たれる。そして、一真の腕輪が光る。

「死にやガレーーーー！」

「んな！っち電気操作！磁力！」

「かかったな！ば～か！“エアバースト！”あっはははははは

はは一真君は何をしているでしょ～か！！！！」

「っまさか！爆発？！」

「大正ー解。っひゃははっはははははははは」

一真の放ったナイフが、怜奈の能力で怜奈の元に引き寄せた瞬間、ナイフが爆発して、怜奈を襲う

「どうだ！馬鹿が！っはははははははは」
「嘗めんじゃないわよ！」
『Ｆクラス　神竜一真　日本史　９９０点』
ＶＳ
『Ａクラス　山口怜奈　日本史　１２９点』
「“超電磁砲”」
「カスが！そんなんで俺の点数…ウォ！」
一真の横を怜奈の超電磁砲が走る
「よく頑張ったが終わりだ！“爆炎放射”消し飛べ！ビビリ！！」
一真のショットガンから熱戦が走り怜奈の召喚獣は消え去った。あたりに、静けさを残して…
そして、一真も元に戻った。ちょっとさびしそうな顔をしながら
「そッそんな馬鹿なことが…うっうわあああああああん」
「まったくだから嫌なのよあんたと接点持つの、幼馴染じゃないほうがよかったわ女子泣かすなんて、あのときの一真、みんなドン引きよ？」
怜奈がペタンと座って泣き出してしまった。一真が優子の言葉に相当ショックを受けながらちょっと困ったように怜奈のそばに行き、
「落ち着け、泣くな泣くな」

と、頭をなでる。そうしているうちに怜奈は泣き止んだ。

「まったく大勢の前で泣くなよ、泣き虫」

「うっうるさいわね、目にゴミが入っただけよ」

「そういうことにしときますか」

そういって一真は笑顔ではなれていった。そこにはぽかーんとした怜奈がいて

「やぱりかっこいいな。一真は」

それは友達である、優子と愛子、それに彩夏以外には聞こえなかった。

そして先ほどの優子の言葉で一真は倒れ三途の川へ、それを見た明久が叫びながら蘇生させ、優子のへの視線が変わったのは別の話。

「最後の方、どうぞ」

「……はい」

「俺の出番だな」

最後は当然、互いのクラスの代表同士。

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は１００点満点の上限ありだ！」

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少しこのまま待っていてください」

ノートパソコンを閉じ、高橋女史は教室を出ていく。
そして、Aクラスの面々はどよめいた。

「上限ありだって？」
「しかも小学生レベル、万点確実じゃないか」
「注意力と集中力の勝負になるぞ……」

2人の代表は、一旦自分達の陣地へと戻る。
まず雄二に声をかけたのは、明久

「雄二、後は任せたよ」
「ああ、任された」

明久が差し出した拳と、雄二の拳が重なる。
次にムッツリーニが歩み寄り、ピースサインを雄二に向けた。

「お前の力には随分助けられた。感謝している」
「……（ふっ）」

口の端を軽く上げた笑みを浮かべ、ゆっくりと戻っていく。
次は瑞希が歩み寄った。

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございました」
「ああ、明久の事か。気にするな、後は頑張れよ」
「はいっ！」

次に当麻が、雄二に向って手を差し出す。

「絶対にかつニャー」

「ああ」

パンッと、を手をぶつけた。

次に祐輝

「いつもみたいな奇跡、期待してるよ」

「任せとけ。」

そういうと祐輝は満足げに自分の席に戻っていった。

最後に一真が歩み寄る

「負けんなよ、雄二」

「ああ。一真、お前と明久が一緒に成した功績には、随分助けられた」

「なあに、俺がやりたいからやったまでだ……頼むぞ、代表」

そして、いつもの5人で拳をぶつけた

所変わって視聴覚室。

「では、最後の勝負、日本史テストを行います。制限時間は５０分、満点は１００点です」

その様子はＡクラスの巨大プラズマディスプレイに映し出され、他の面々はそこで待機。

「不正行為などは即失格になります。良いですね？」

「……はい」

「わかっているさ」
「では、始めてください」

そして、問題は始まった。
Fクラスの面々は、ディスプレイに映し出される問題を凝視し始める。

勝利のカギを、懸命に探すために。

＜＜次の（　）に正しい年号を記入しなさい＞＞
（　）年　平城京に遷都
（　）年　平安京に遷都
・　・　・
（　）年　鎌倉幕府設立
・　・　・
（　）年　大化の改新

「あった……あったぞ！」
「じゃあ、ウチ等の卓袱台が……」
「うん！　最下層に位置した僕たちの、歴史的な勝利だ！！」
「「「うおぉぉおおおおおお！！！」」」

Fクラスの面々が、歓喜の雄たけびを上げた

「ん、何かが引っかからないか？みんな」
一真の声で全員が考える。

＜日本史勝負　限定テスト　１００点満点＞
『Ａクラス　霧島翔子　９７点』
ＶＳ
『Ｆクラス　坂本雄二　５３点』

Ｆクラスの卓袱台が、みかん箱になった

「総員、武器をとれ！　これよりあのゴリラ野郎を処刑するぞおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」
「作戦は殴りこみニャー！あのゴリラを処刑するニャー！！！！！」
「さすがに僕も許せないさっきまでの感動のシーンを返せー！！！！」
「一真達に続け！　期待と信頼を裏切ったあのバカ野郎に、僕たちの怒り全てをぶつけてやるんだ！！」
「「「おおおおおおお！！！」」」

Ｆクラスの面々は、怒りの雄たけびを上げ視聴覚室へと
先陣を切るのは神竜一真、続くは吉井明久、その後ろに破神当麻、大神祐輝。
全員の手には神竜一真と破神当麻のコレクションが握られていた。

第１３話　最強のＡクラスＶＳ最弱のＦクラス（後書き）

次で、今週ラストです。（明日投稿）

第１４話　終結俺たちの第一次試召戦争！！（前書き）

作者風邪をひきました。正直つらいです。

問題　以下の問いに答えなさい

『人が生きていく上で必要となる５大栄養素をすべて書きなさい』

姫路瑞希、大神祐輝の答え

『？脂質　？炭水化物　？たんぱく質　？ビタミン　？ミネラル」

教師のコメント

流石は姫路さんに大神君。優秀ですね

神竜一真　破神当麻の答え

『？孤独　？処刑　？剣　？死　？恐怖」

教師のコメント

君達の将来があらゆる意味で心配を通り越して不安です。

吉井明久の答え

『？砂糖　？塩　？水道水　？雨水　？湧水」

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、更に十八歳になっても所長がない時を原発性無月経といい……』

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

第１４話　終結俺たちの第一次試召戦争！！

終結俺たちの第一次試召戦争！！

「雄二、てめえゴラぁぁァ！！」

視聴覚室の扉が開かれ、Ｆクラスの武装集団が押し寄せる。

「４対３で、Ａクラスの勝利です」

それに構う事なく、高橋女史はそう宣言。

そのそばでは、座りこむ雄二とその傍で雄二を見下ろす翔子。

「……雄二、私の勝ち」

「……殺せ」

「いい度胸だ、殺してやる！　歯をくいしばれ！！」

「待て明久、その前に俺の剣の奥義の餌食にするべきだ！！」

「待つニャー。その前にナイフの的あてにするニャー！！」

「いや、マシンガンで蜂の巣だろう！！」

掴みかかろうとする明久を制し、両腕や肩、背にコレクションを重装備した一真が木刀を雄二に突き付ける。そしてその後ろには、マシンガンとナイフの祐輝と当麻

明久はそれを見て頷き、先程一真から渡されたガトリング砲を雄二

に突き付けた。

「吉井君、落ち着いてください！」
「一真も、落ち着きなさいよ！」
「当麻、落ち着いて！！」
「大神も、話しなさい！！」

瑞希が明久を、優子が一真を、当麻を朱里が、祐輝を怜奈が制し、雄二から引きはがそうとした。

「大体、５３点って何！？　０点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数じゃ……」
「いかにも、俺の全力だ」
「「「「っざっけんな！！！このゴリラ野郎！！」」」」

一真は更にトンファー（改造）を取り出し、雄二に突き付けた。祐輝と当麻に明久も続く
だがそれは、美波によって阻まれる。

「吉井、落ち着きなさい！　アンタだったら、３０点も取れないでしょうが！」
「当麻もだよ！あんたも日本史駄目でしょ」
「「それについては否定しない！」」

明久の声と当麻の声が、寸分狂いなく合わさった。

「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ！」
「くっ、６人とも何故止めるんだ！？　このゴリラには喉笛を引き裂くと言う体罰が必要なのに！！」
「それって体罰じゃなく処刑です！」

「いや、全員でぼこ殴りにした後、日本刀で全員で切るんだ！！！！！」
「待ちなさい一真！　前半はともかく、後半が明らかに処刑でしょ！」
「それよりもワイヤーナイフで臓器に的あてニャー！！！！！！！！」
「当麻、そんなことしたら確実に死ぬでしょ！」
「いいや軍の練習場に放り投げて、戦車に引かれるもしくは撃たれるんだ！イタリアならできるだろ！一真！早速軍に連絡を！」
「「「「それだ！！！！！」」」」
「「「「「それだじゃない！」」」」」」

6人に引き留められ明久と当麻は大人しく（？）引き下がる事にしかし、まだあきらめてない二人がいた。

「当麻！明久！お前らはいい！俺と祐輝でやる！！」
「そうだとも一真。絶対に軍の戦車に雄二が引かれるところを写メにおさめるんだ！！！！！！！」
「落ち着きなさいよ二人とも！」
「そうよ一真、大神君！！」
「「俺たちがとめられる理由がどこにある！！」」

そういうと、祐輝と一真は、マシンガンと木刀を持って、雄二に突撃する。しかし、

っビッターン

っと、誰かに足を引っ掛けられて盛大にこけた。祐輝、一真ともに苛立った表情でこかした相手を睨む

「いい加減にして一真、祐輝。話が全然進まないから。」

「「あ、あ、明日菜！」」
「二人とも攻撃をやめなさい。」
「「はいはい。」」

そこにいたのは、祐輝の妻にして一真の幼馴染、十六夜明日菜だった。ちなみに祐輝と結婚してるのに、苗字が違うのは、学校でばれたら面倒だからだそうだ。今は、明久と同じマンションで二人暮らしだ。

「……でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断していなければ、負けていた」
「言い訳はしねえ」
「潔いのは結構だが、あまりにも情けなさすぎるぞ？　手を抜いて負けるなんて」
「そうだ！お前は明日から永久異端者だ！」
「絶対に明日は来ないと思うニャー！」
「……ところで、約束」
「……！（カチャカチャカチャ！）」

翔子の言い放った言葉で、ムッツリーニと明久が突如撮影準備を始めた。
その場にいなかった一真をはじめ、Ｆクラスのギャラリーは疑問符を浮かべる

「え？　どういう事？」
「霧島さんの提案で、負けた方は何でも言う事を聞くって約束をしたの」
「……成程ね」

一真は明久とムッツリーニの思惑を理解して、ため息をついた。

翔子に視線を戻すと、瑞希に視線をやった後に雄二に視線を戻した翔子が……

「……雄二、私と付き合って」

と、言い放った。

「「「……へ？」」」

一真を除き、Ｆクラスの面々どころかＡクラスの面々も面食らった。それもそのはず、霧島翔子は同性愛主義者だと言う噂が、誰もがそれを疑わない程有力となっていた。だからこそ、男性である雄二に冗談や酔狂とは思えない表情で告白する姿は、正直意外その物だろう。

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか？」

「……私は諦めない。ずっと、雄二の事が好き」

「その話は何度も断っただろ？　他の男と付き合う気はないのか？」

「……私には、雄二しかいない。他の人なんて興味ない」

その姿を見て、全員が噂の真実を確信した。

つまりは霧島翔子についての噂は、一途に雄二を想っていたが故である事に。

「拒否権は？」

「雄二、んなもんある訳ないだろ」

「……その通り。約束だから、今からデートに行く」

と、雄二の首根っこをつかむ。

「ぐぁっ！　離せ！　やっぱこの約束はなかった事に……」
と、雄二は抵抗するも何故かびくともしない。
そのまま教室を出て行こうと……
「ちょっと待った」
するのを、一真が止めた。
「……何？」
「一真……すまん、恩に着る！」
「これを貸してやる」
と、翔子にある物を手渡した。
スタンガン（１００万ボルト）
「襲いかかってきたら、これを使うと良い」
「テメ、何の心配してやがる！？」
「問題ない。雄二になら襲われても良い」
問題発言だったが、誰もが絶句している状態のため特に反応は来なかった。
「じゃあ逃げようとしたら使ってくれ。俺でよかったら、幾らでも協力するから」
「ありがとう。神竜、良い人」
「良い人じゃねえ！　一真、テメ覚えてやがれ！　生きてたらぶっ殺してやる！！」
「幸せになれ、我が友（笑）よ。ふふふ俺たちを裏切った罰だ。な

あみんなこれでいいな！」
「「「おう！！」」」

と、再度雄二の首根っこをつかみ、2人は遠くへと去って行った。

「さて、私もね」

といきなり朱里が言い出す。と突然当麻が逃げ腰になる。

「まさか！当麻お前！！」
「くっ残念だがここは金をだすしか」
「そっそんな雄二のせいで当麻の金が！」
「おのれ雄二！」
「何言ってるのよ、私と当麻が約束したのは、負けたほうが言うことを聞く。だから金は減らないわよ」
「えっ金じゃないのかニャー」
「もちろんよ、当麻、私と付き合いなさい拒否権なんて無いわよ」
「えっ待て離して、何で当麻さん！？ちょっちょっと？一真助けてニャー」

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

辺りが静寂に包まれる。その沈黙を明日菜が破る。

「祐輝、お買い物行きたい。夕飯が作れないから。」
「明日菜、君と僕は約束してたっけ？」
「祐輝、とぼけても無駄だぜ。この空気だったら、もう全員どんな関係か予測はつく。」
「だよね～。異端審問会、引っかかりたくないんだけどな～、っま

いっか、いこっか明日菜。」
「うん。」
そういって、祐輝と明日菜は、腕を組んで出て行った。
また静寂が包む。それを破ったのは、とある教師の声。
「さて、Fクラスの諸君、お遊びの時間は終わりだ」
「あれ？　西鉄先生？　俺たちに何か？」
「おい待て。今俺の名前と鉄人を組み合わせて、斬新な名字を作らなかったか？」
「あっ、すみません。鉄人先生」
「違う、鉄人に統一しろと言ったんじゃない！　……まあ良い、今から我がFクラスに補習について説明しようと思ってな」
我がFクラスという言葉に、ほぼ全員の脳裏にある嫌な予感がよぎった。
「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から補習授業担当のこの俺に担任が変わるそうだ。これから1年、死に物狂いで勉強できるぞ」
「「「なにぃっ！！？」」」
クラスの男子全員が悲鳴を上げた。
「いいか。確かにお前たちはよくやった。Fクラスがここまで来るとは、正直思わなかった。でもな、幾ら“学力が全てではない”と言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つなんだ。全てじゃないからと言って、蔑にしていい物じゃない」

負け方が負け方だけに、グゥの音も出なかった、っがとある一人だけ反応が違った。

「っは、勉強なんて退屈なだけだ。俺は頭いいからな。学年一。」

「そんなこと言っても無駄だ神竜。吉井と神竜、そして坂本に破神、大神は特に念入りに監視してやる。何せ開校以来初の“観察処分者”と“危険人物”。ならびに“Ａ級戦犯達”だからな」

「そうはいきませんよ！　何としても監視の目を掻い潜って、今まで通り楽しい学園生活を過ごして見せます！」

「その通り！　一筋縄でいくとは思わない事ですね。村人先生。」

「……お前らには、悔い改めるという発想はないのか？　それと神竜、勝手に斬新な名前をつけるな」

彼らには、その気は一切なかった。

というのは、ポーズだけだが。

「とりあえず明日から、授業とは別に補習の時間を２時間設けてやろう」

「うぇっ！？　…最悪。これ以上勉強したら、１０００点オーバーしちまうよ。っまやってみるか。」

「うーん……そうだね。また３ヶ月後に鉄人の魔の手から逃れるって目標が新しく出来たから、やってみようか」

「やる気が出たのはうれしいが、もうちょっとマシな理由はないのか？」

「「ありません！というかもう脱走の準備を始めてます！！」」

呆れるように言う鉄人に、２人して堂々と言い放った

「それじゃ今日はもう終わりだし、秀吉介抱してから帰るか。みんな夫婦そろってどっかいったし。」
「そうだね。帰って何しようかな？」
「姫路誘ってデートでもすればいいだろ。これやるから、頑張れ。」
と、一真は映画のチケットを明久に手渡した。
実は“優子を誘うつもり”で買った物なのだが……。

「俺にはもう必要ないし、お前にやる。お前も誰かとくっつけ、そしたら俺が楽になる。」
「え？　でも……」
「良いから」

と、押しつけるようにチケットを手渡した。

「ねっ、ねえ吉井！　そのチケットの映画、ウチ観たかったのよ！」
「わっ私も、その映画観たかったんです！　一緒に行きませんか！？」
「え？　何々！？　どうして2人して殺気立ってるの！？」

と、それを見るなり瑞希と美波が、我先にと明久に詰め寄った。
それを見て、一真は笑みを浮かべる……が、彼の演技だと、悲しそうに笑うのが精一杯だった。

「……良いよなあ、明久も雄二も当麻も祐輝も信じれる人がいて。」
「何黄昏てるのよ？」
「ふっ親友がモテて、俺はお前にボロクソにフラれて、［集中モード］出して、危険だからもうもてることも無い。そういう気にもなるよ。俺って運ないわ～。イタリアだったら部下に八つ当たりして

るとこだぜ！ったく。」
実際、その所為で試験召喚戦争に勝った側として、罪悪感を感じた優子だった。
「それにしても、まだ諦めてなかったのね？」
「俺もそのつもりだったよ……で、何でまだいるんだよ？」
「忘れてない？　Ｃクラスの事」
一真はすぐさま逃げようとしたが、優子に首根っこをつかまれ失敗。
「ちょっ、待て！　あんな事言われて罰なんて、理不尽にも程がある！！」
「それもそうだけど、だからと言って許す理由にはならないわ。まあ体罰は勘弁してあげるから、今日は買い物に付き合って貰うわよ？」
「名目が名目だから嫌な予感しかしねえ！」
「あっ優子あたしもいい？」
「僕も行きたい！」
「私もいきたい！」
「いいわよ、全部こいつが買ってくれるから。こいつサッカーとバイトで結構金持ちなのよ？」
っと怜奈、愛子、彩夏が行きたいと言い出し一真は瑞希と美波に圧されてる明久に目をやると、明久も頷いた。
まあ一真が原因だと言うのは、おいておくとしてだが……。
「鉄人先生、やっぱり補習今からやりましょう！　個人で良いですから！！」
「そうです。思い立ったが仏滅ですよ！」

「吉日だバカ。まあお前たちがやる気なのはうれしいが……まあ無理をする事はない。それに吉井も神竜も、彼女が出来れば少しは更生するかもしれんしな。先生は大いに応援してやるぞ」

普通に考えれば、ある意味男女交際を応援する様な事。
だが2人には地獄へ突き落される様なことこの上ない。

「おのれ鉄人！　僕たちが苦境にあると知った上での狼藉だな！？
こうなったら卒業式の日に、伝説の木の下で釘バットをもって貴様を待つ！！」
「ぬるい明久！！俺は新年にあんたの家に爆弾仕掛けて爆破する！！！家族もろとも死ぬんだ鉄人。ちょっと待ってろ、殺人許可証もらってくっから」
「斬新な告白だな、おい、っというか神竜、殺人許可証とはいったいなんだ？」
「っやっべ、鉄人それ以上言ったら首飛ぶからな。俺もまだまだだな。だが、」

鉄人に詰め寄ろうとしたところを、明久は美波に、一真は優子と怜奈にネクタイをつかまれ引っ張られる。

「逃げようったってそうはいかないわよ、吉井」
「そうよ一真。私の風評に傷を付けてくれた罪、きっちり償って貰うわよ？」
「あたしを泣かせたんだからちゃんときなさい」
「僕も皆がいるしねー」
「私も愛子と同じ理由～」
「では吉井君、この際3人で良いですし、神竜君に木下さん達も同伴でいいですから行きましょう」

明久の方はそれに瑞希も加わり、左腕を抱きかかえるように引っ張り始める。

「ちょっと待って姫路さん！　なんで雄二の事をほっといて、僕と映画を観たがるの！？」

「坂本君？　何のことですか？」

「え！？　だって……もしかして、違うの！？　じゃあ誰が」

「無駄口叩いてないできなさい！」

「ぐぶっ！　ちょっ、ぐるじ……」

美波が引っ張る力を強め、ネクタイが首を締め付ける。

瑞希もそれに構わず、ただ引っ張る事に必死になっていた。

「なあ優子、手を離して。秀吉介抱しないと」

「そうね。じゃあ一緒に行ってあげるわ？　そう言って戻ってこない可能性も否定しきれないし」

「まあそうね」

「僕も行く」

「私もいきたい」

「少しは信用してくれ！後そんな大勢で言ったら俺も異端者に引っかかるんだよ離せーーー！！」

とりあえずだが、明久と一真をはじめ、先行した雄二と当麻には幸せそうで不幸なひと時が待っていた。

「「たすけてくれえええええええええええええええええええええええええ」」

これが学園中に響き渡る叫びだった。

第一次試召喚争編

＜了＞

第１４話　終結俺たちの第一次試召戦争！！（後書き）

いや～日曜までにできませんでした申し訳ない

今日の質問

あなたの好きなライトのベルは何ですか？（バカテス以外）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2259y/

バカとマフィアと召喚獣

2011年11月17日20時20分発行